

妙見山遺跡

1995年3月

島根県

木次町教育委員会

序 文

木次町教育委員会は平成3年、大字里方地内にある「中山」を開発するため、本町として本格的な埋蔵文化財発掘調査を実施したところ、古墳時代前期の貴重な古墳と判断され、それをまとめ「斐伊中山古墳群－西支群」として報告書を刊行いたしました。

この度は平成5年から平成6年にかけて木次町・三刀屋町公共下水道終末処理施設の建設に伴い、先の中山古墳群の間近にあって、出雲国風土記にみられる「城名樋山」と尾根を分け隔てた妙見山の発掘調査を実施しました。

調査の結果「妙見山遺跡」からは堀立柱建物や土坑等の遺構や調査区全域から1万点以上に及ぶ中世の土師器片のほか、完形の灯明皿、鉄器等が検出され、この調査によって、本町にとって数少ない中世の歴史資料を得ることができました。

この調査に当たり、調査担当をお引受けいただきました三刀屋町教育委員会板垣 旭主任主事、調査および報告書の作成に当たり懇切なご指導、ご助言を賜りました島根県教育委員会文化財課、広江耕史文化財保護主事、丹羽野裕同主事、県文化財保護指導委員、杉原清一先生のほか埋蔵文化財調査センター2係の皆様をはじめ、関係者の方々より格別のご協力を賜りましたことに対し、ここに衷心より感謝を申し上げます。

平 成 7 年 3 月

木次町教育委員会

教育長 橋 本 敏 雄

例　　言

1. 本書は木次町・三刀屋町公共下水道事務組合の委託を受けて、木次町教育委員会が平成5年11月1日から平成6年3月31日に実施した木次町・三刀屋町公共下水道終末処理施設建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 木次町教育委員会

　　教育長 橋本敏雄

調査指導 角田徳幸（県文化財課文化財保護主事）

　　今岡一三（県文化財課文化財保護主事）

　　蓮岡法暉（島根県文化財保護指導委員）

調査担当 板垣旭（三刀屋町教育委員会主任主事）

調査補助 坂本諭司（木次町教育委員会主幹）

事務局 平成5年度 平成6年度

　　土江和良（教育次長）　　土江和良（教育次長）

　　新一幸（社会教育係長）　坂本武男（社会教育係長）

　　大坂博宣（主任主事）　　大坂博宣（主任主事）

　　浅沼博（社会教育指導員）

発掘調査及び報告書作成に際して次の方々や関係機関から多大な協力を得ました。記して謝意を表します。

　　広江耕史（県文化財課文化財保護主事）丹羽野裕（同主事）

　　杉原清一（島根県文化財保護指導委員）

　　島根県埋蔵文化財調査センター、三刀屋町教育委員会、木次町森林組合

調査参加者 安部重福、加藤陽一、竹田嘉、田中林三郎、菅田久夫、片寄考吉

　　来間重春、川本勝雄、西村愛喜、井戸内司、中村利夫、佐藤義美

　　小村昌、新良一、坂本広由、川島文明、郷原祐樹、他

遺物整理 板垣貴子、星野裕子、給下信子、布野直樹、奥田恵子、野々村幸子

3. 挿図中の方位は磁北を示す。

4. 本書で使用した遺跡記号は次のとおりである。

　　SB－堀立柱建物、SK－土坑、

5. 本書の編集は、板垣と坂本が協議してこれを行った。

6. 遺物の実測、本文の執筆は島根県教育庁文化財課の指導・助言を得て坂本諭司が行った。

　　なお、池淵俊一、寺谷隆、松本浩の各氏には遺物実測において協力をいただいた。

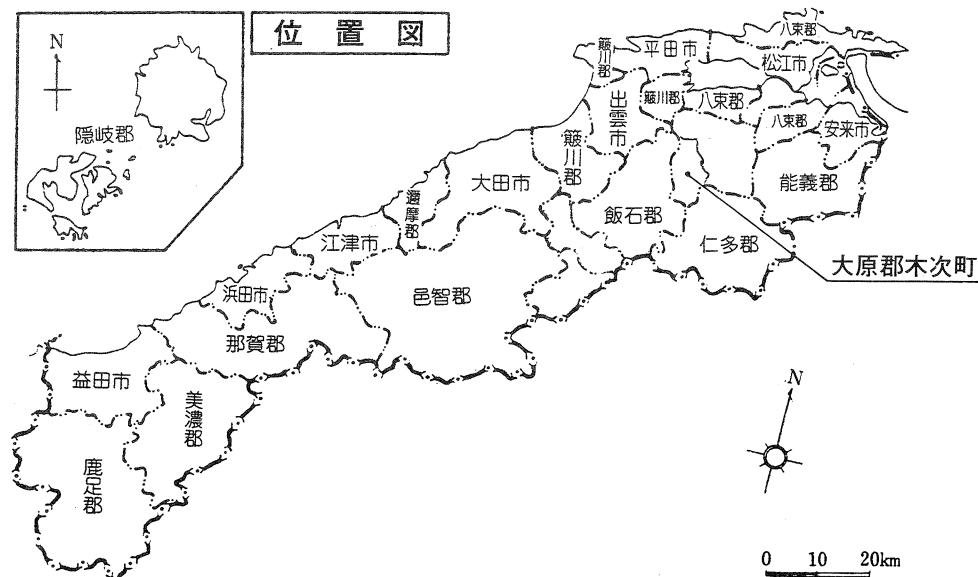
7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は木次町教育委員会で保管している。

目 次

序 文

例 言

| | |
|--------------------|----|
| 第1章 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2章 位置と環境 | 1 |
| 第3章 調査の経過と概要 | 6 |
| 第1節 遺構 | 6 |
| 第2節 遺物 | 13 |
| 第4章 まとめ | 33 |



挿図・図版目次

| | | |
|-----------------------|----|---------------------------------------|
| 第1図 妙見山遺跡の位置と周辺の遺跡 | 2 | 図版1 妙見山遺跡遠景、妙見山全景 |
| 第2図 調査前全体地形図 | 3 | 図版2 南側加工段西・東斜面土層堆積状況 頂上建物群作業風景 |
| 第3図 断面土層図 | 4 | 図版3 S K02遺物出土状況 S K04焼土検出状況 |
| 第4図 遺構配置図 | 5 | 図版4 南側加工段遺物包含層、地山表出状況 S K03検出状況 |
| 第5図 S B01、02実測図 | 7 | 図版5 頂上建物群・西側加工段完掘状況 |
| 第6図 S B03実測図 | 8 | 図版6 頂上建物群出土遺物 (1) |
| 第7図 S B04実測図 | 10 | 図版7 頂上建物群出土遺物 (2) 西側加工段出土遺物 (1) |
| 第8図 S K02実測図 | 11 | 図版8 頂上建物群出土遺物 (3) S K02出土遺物 (1) |
| 第9図 S B05実測図 | 11 | 図版9 S K02出土遺物 (2) |
| 第10図 南側加工段遺構配置図 | 12 | 図版10 S K03出土遺物 (1) |
| 第11図 S K03遺物出土状況 | 13 | 図版11 S K03出土遺物 (2) 南側加工段出土稲モミ压痕土器片 |
| 第12図 土師器 小壺実測図 | 13 | 図版12 南側加工段出土遺物 (1) |
| 第13図 頂上建物群出土土器実測図 | 15 | 図版13 南側加工段出土遺物 (2) |
| 第14図 頂上建物群出土鉄器実測図 | 16 | 図版14 南側加工段出土遺物 (3) |
| 第15図 西側加工段出土土師器実測図 | 17 | 図版15 南側加工段出土遺物 (4) |
| 第16図 S K02出土土器実測図 | 19 | 図版16 南側加工段出土遺物 (5) |
| 第17図 西側加工段出土鉄器実測図 | 20 | 図版17 南側加工段出土遺物 (6) 南側加工段西側出土遺物 |
| 第18図 S K03出土土器実測図 (1) | 21 | 図版18 南側加工段西側出土遺物 (1) |
| 第19図 S K03出土土器実測図 (2) | 22 | 図版19 南側加工段西側出土遺物 (2) |
| 第20図 南側加工段出土土器実測図 (1) | 24 | 図版20 頂上建物群出土鉄器 西側加工段出土鉄器 |
| 第21図 南側加工段出土土器実測図 (2) | 25 | 図版21 南側加工段出土鉄器 |
| 第22図 南側加工段出土土器実測図 (3) | 26 | 図版22 南側加工段出土砥石・鉄滓 |
| 第23図 南側加工段出土土器実測図 (4) | 28 | |
| 第24図 南側加工段出土鉄器実測図 | 29 | |
| 第25図 南側加工段出土砥石・鉄滓実測図 | 31 | |
| 第26図 南側加工段西側出土土器実測図 | 32 | |
| 表-1 妙見山遺跡出土土師器数概算表 | 34 | |

第1章 調査に至る経緯

平成5年、木次町・三刀屋町公共下水道事務組合により両町の下水道整備事業を推進するため、木次町大字里方地内に公共下水道終末処理施設の建設設計画が策定されたことにより、同年9月1日付で同組合から木次町教育委員会に「木次町・三刀屋町公共下水道終末処理場」建設予定地内の埋蔵文化財分布調査の照会がなされた。

当時、埋蔵文化財専門調査員を有しなかった木次町教育委員会は、その確認を三刀屋町教育委員会に依頼し、依頼を受けた三刀屋町教育委員会は平成5年9月10日該当地区内の遺跡分布調査を行った。しかし散雜する雑木、荒木等により明確な判断材料が得られなかつたため、現地を伐採の後11月19日再度分布調査を試みた。

その結果、周知の遺跡でもある城名樋山から南西に派生する尾根筋の独立した丘陵の山頂部に、明らかに人工的に掘削された平坦地が確認された。また後日の詳細分布調査により土師器、須恵器、鉄器等が出土したため、遺跡の存在が確認され、この旨が木次町教育委員会に報告された。

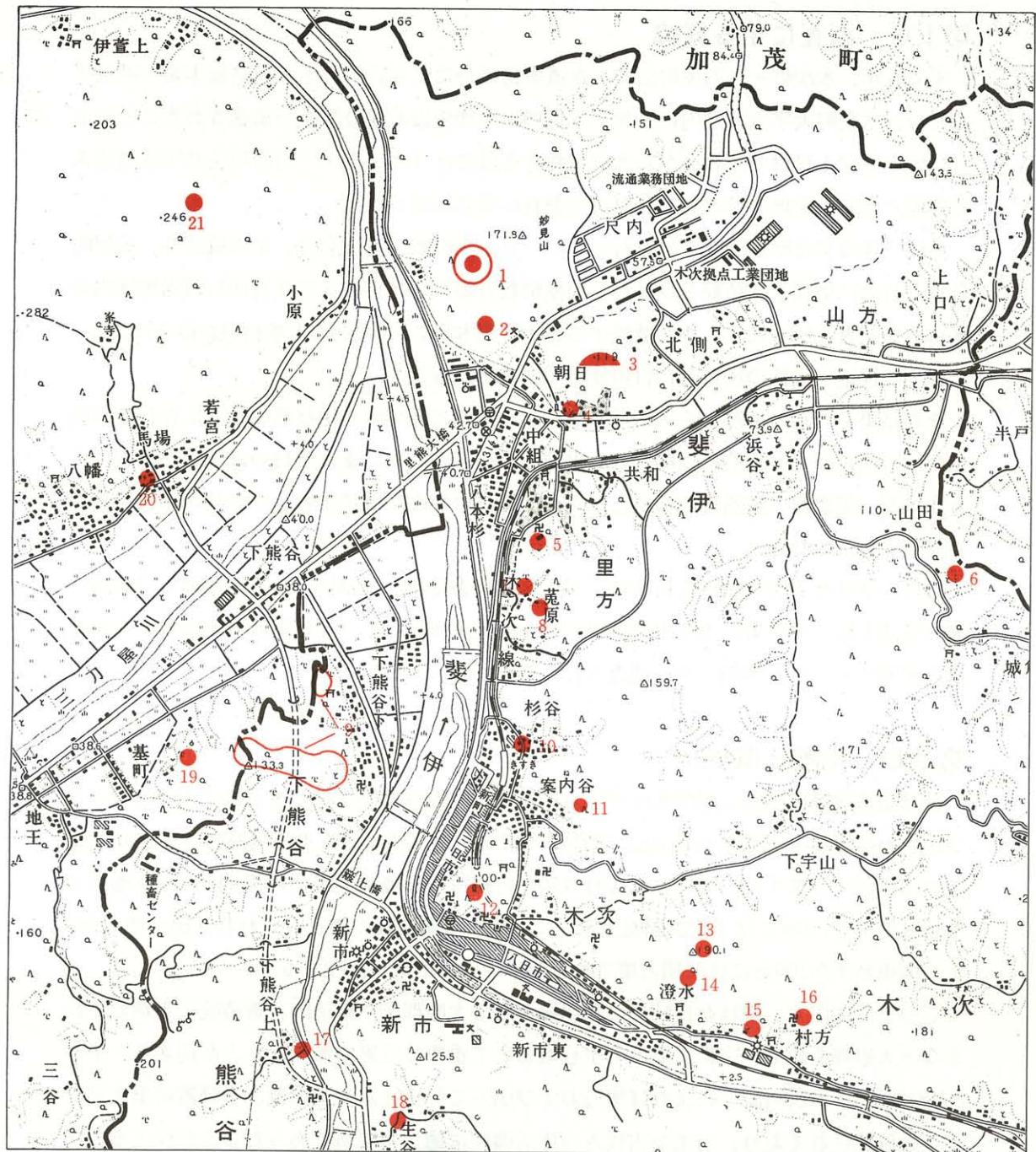
報告を受けた木次町教育委員会は三刀屋町教育委員会、同組合との三者において数回に渡り協議を行った結果、木次町教育委員会を調査主体として三刀屋町教育委員会から調査員を派遣するという体制で発掘調査を行うことになった。

第2章 位置と環境

妙見山遺跡は島根県大原郡木次町里方に所在し、大原郡加茂町と境を接する山地の中でひときわ高峰な山塊である妙見山（標高171.82m）から西に派生する尾根筋に独立した丘陵の山頂部に位置する。現在の木次町外10ヶ町村雲南環境衛生組合の東約200mの地点で本遺跡の南方1.8kmには「出雲国風土記」に登場する新造院の礎石といわれる出土地点が、また南東わずか700mには前期古墳である斐伊中山古墳群が存在する。

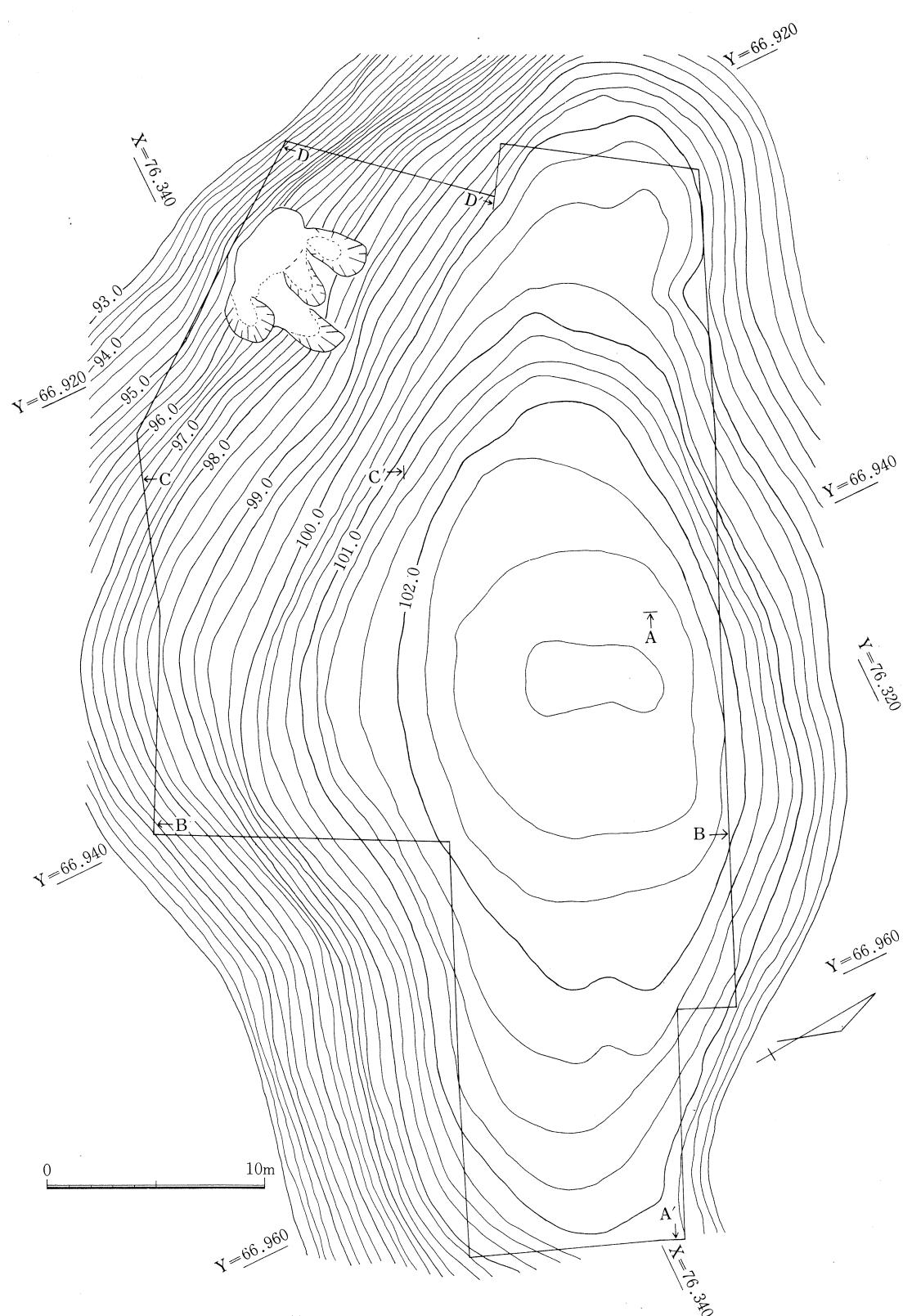
このように里方一帯は奈良時代の斐伊郷として大原郡家や新造院、新造院尼寺がおかれるなど大原郡の政治、宗教、軍事の中心地として重要な位置であったことが伺える。また「大原郡誌」「木次町誌」によれば里方および山方で弥生土器や須恵器、土師器の出土例が点々と確認されており、当地が古代人の生活環境に適した場所であったことが伺える。

さて地形についてであるが斐伊と下熊谷を分断し、三刀屋川と合流して宍道湖へ流れるのが斐伊川である。この上流では古代からたらの操業に不可欠な「かんな流し」といわれる砂鉄採集が行われた。これが中世を経て江戸時代になるといっそう盛んになり、土砂の流出を伴って天井川を形成するに至る。その後斐伊川はたび重なる大洪水を來し、人々を苦しめてきた時代があった。それでは古代の斐伊川はどんな様子だったであろうか「木



妙見山遺跡の位置と周辺の遺跡 S=11

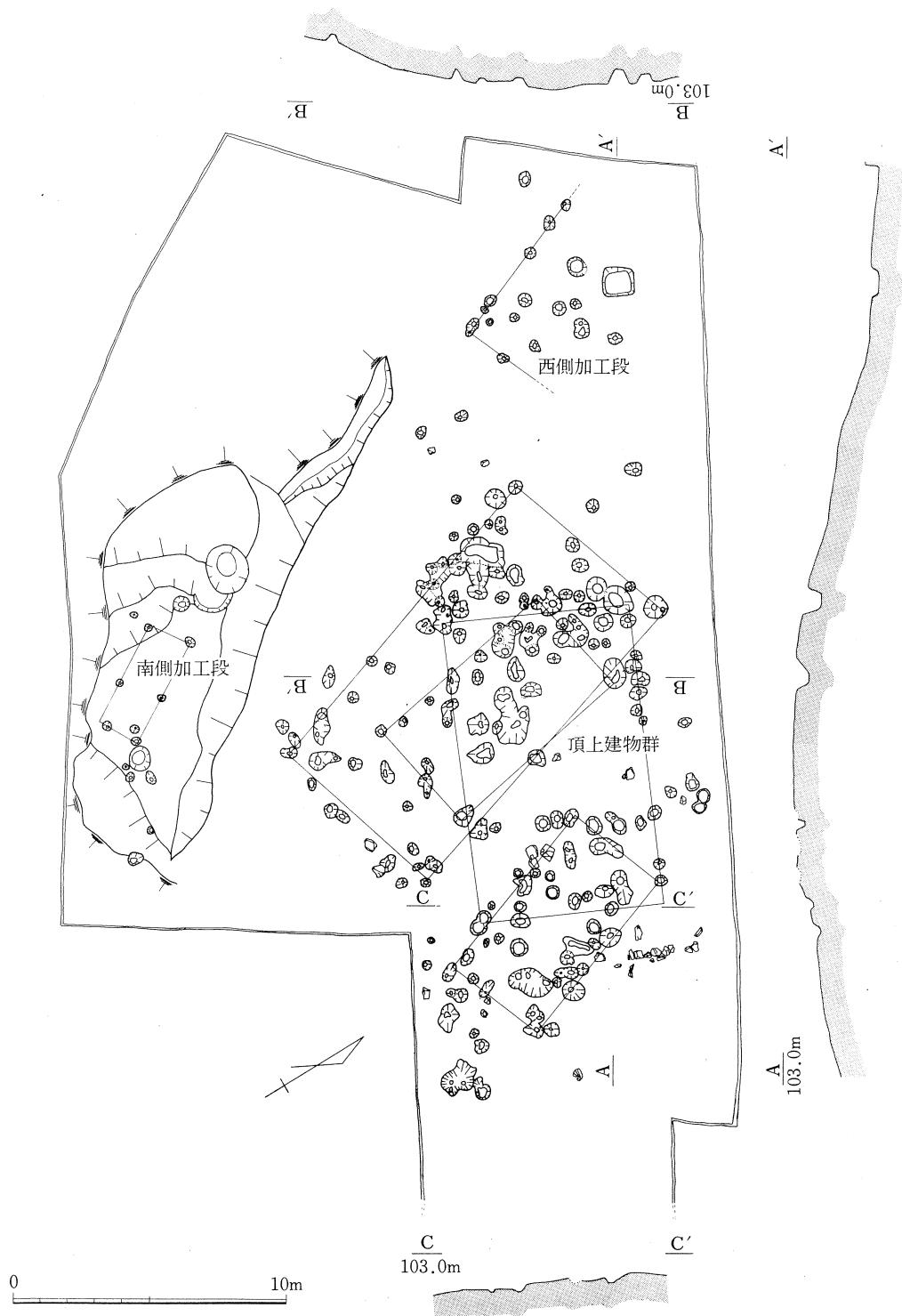
- | | | | | |
|-----------|-----------|------------|-----------|-------------|
| 1. 妙見山遺跡 | 2. 城名樋山 | 3. 中山古墳群 | 4. 里方横穴群 | 5. 斐伊郷新造院跡 |
| 6. 早稻田横穴群 | 7. 明徳寺遺跡 | 8. 明徳寺横穴群 | 9. 熊谷軍団跡 | 10. 斐伊郷新造院跡 |
| 11. 案内横穴群 | 12. 秋葉山城跡 | 13. 霞龍山城跡 | 14. 澄水横穴群 | 15. 木次焼窯跡 |
| 16. 保元寺跡 | 17. 深谷古墓 | 18. 下吉井横穴群 | 19. 要害横穴 | 20. 大門口遺跡 |
| 21. 蛇谷城跡 | | | | |



第2図 調査前全体地形図 ($S = \frac{1}{250}$)

第3図 土層断面図 ($S=1/25$)





第4図 遺構配置図 ($S = \frac{1}{250}$)

次町誌」によると「出雲国風土記」に“渡二十五歩”とあり、当時の川幅が約44.5mと考えられ、しかも堤防もなく天井川でもなかったと考えられる。それが現在では約240mにもなり、川幅が約5倍になったことになる。近年里方地内でボーリングを行ったところ、地下13mの地点から稻モミや田土が検出された記録があり、斐伊川の歴史を物語っている。

第3章 調査の経過と概要

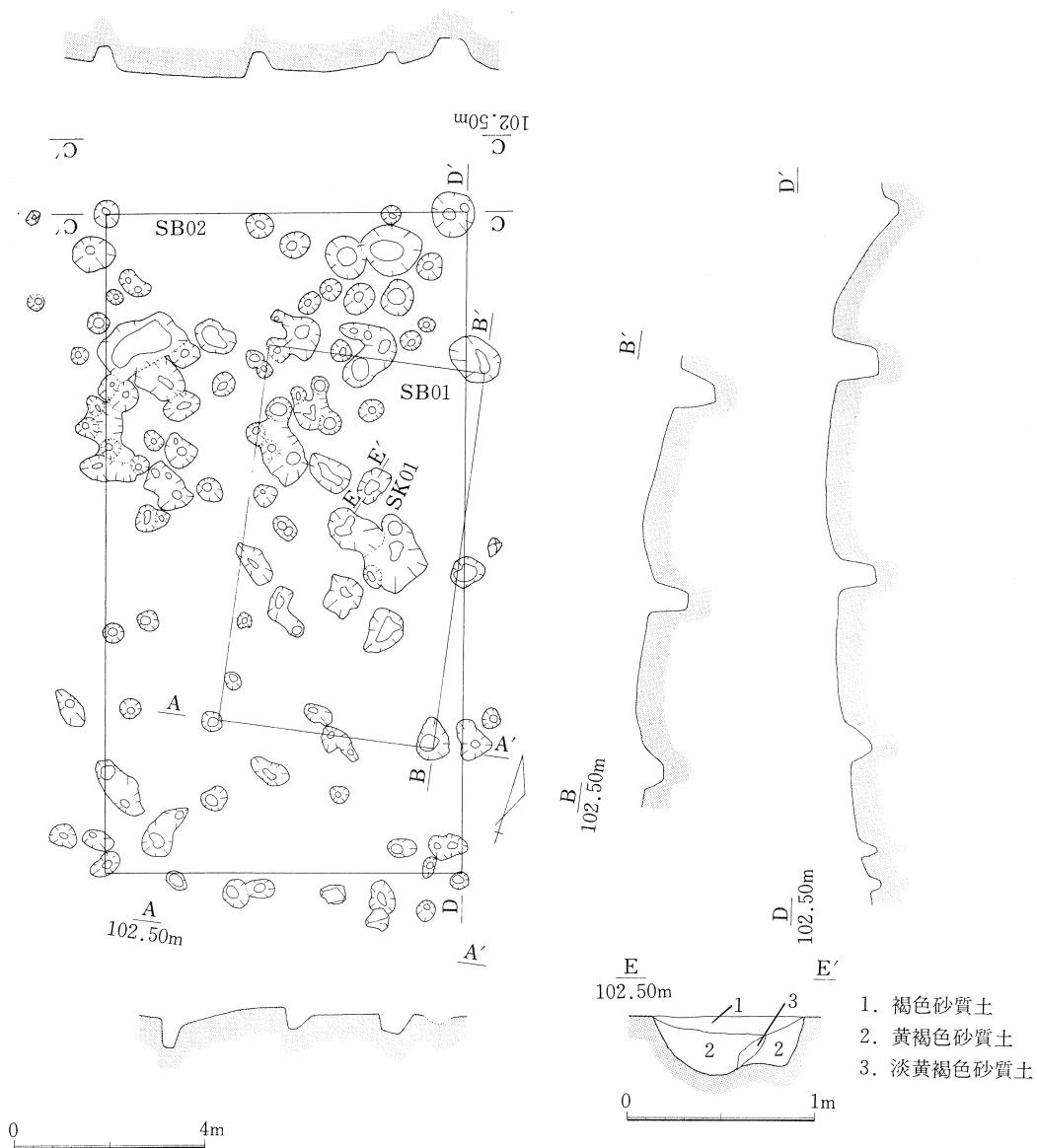
妙見山遺跡は島根県大原郡木次町里方1,369-14番地他に所在し、南には「出雲国風土記」中に熊谷軍団があるといわれている木次町下熊谷地区が、また南西には国道54号線に沿って南西に延びる三刀屋町の小平野が一望できる標高102.5mの急峻な山丘である。

調査は1993年7月26日から8月12日にかけて部分発掘を行った。調査方法は平坦面に十字トレンチを設定して表土の除去を行った。本調査は11月1日から開始し、当初2ヵ月程度で終了するものと考えられたがおびただしい土器の出土に加え、松根の除去に手間どったり、折からの厳しい寒さと積雪によって調査は困難を極め、結局1994年3月18日に調査を終えた。

調査区は当初I区からVI区まで6分割していたが、その後遺構の検出状況を考慮して山丘の中央頂上部から東にかけての平坦部を頂上建物群、その西側に一段下がったところを西側加工段、そしてさらに南に一段下がった平坦面を南側加工段と3地区にかけることにした。なお、頂上建物群のもっとも東側は遺構が確認されなかつたため遺跡配置図を省略することとした。既述したとおり現地状況は雑木と松の木が入り交じり、表土の掘削に当たって松根も全て除去したところ、ほぼ全ての根穴から土器片が出土したため柱穴か否かの判断に苦しんだが数棟の堀立柱建物が復元されたほか、土坑や数多くの遺物が検出され、頂上建物群からは4棟の建物と石列による区画遺構及び土坑、西側加工段の土坑からは中世の土師器が完形で出土した。また南側加工段の土坑からも土師器がまとまって出土したほか、焼土も検出された。

遺物に関して注目されることは、調査区全域から小片を含め1万点をはるかに超える中世土器片が出土したことである。この中には灯明皿として使われた杯や皿が多数含まれ、また穿孔土器も出土したことからこの遺跡が山岳信仰、あるいは祭祀に関連のある可能性もある。また奈良時代後期と見られる須恵器の杯身や甕片、さらに調査区全般にわたって鉄釘が出土しており、古代から中世にかけて木次、三刀屋の小平野を望む高台に複数の建物が存在していたことが伺える。さらに南側加工段では碗型滓や鍛冶滓等の鉄塊系遺物が出土したが残念ながら鍛冶に伴う遺構は確認できなかった。

以下、地区ごとに調査の概要を記してみた。



第5図 SB01・SB02 実測図 ($S = \frac{1}{160}$ SK01断面 $\frac{1}{40}$)

第1節 遺構

頂上建物群

調査区は本遺跡のほぼ中央最上部に位置し、平坦面が東に向かって緩やかに下降したあと、調査区外の急峻な支丘は妙身山山頂に続いている。西側は加工段となっており、頂上平坦部との比高は約2.5mである。また北側は調査区を境にして急な崖となっている、土層状況としては一部に攪乱土が見られるほかは10cmの腐植土層の下に30cmにわたって黒褐色土があり、続いて大部分が風化した黄褐色の砂質土となって地山に変化している。

SB01 (第5図)

頂上部の中心部に当たり、ピットと松根が混在しているが桁行は2間8m、梁行2間4.5mの堀立柱建物で桁の方向はほぼ磁北を向いている。柱穴は直径16cm～32cm、深さ16cm～30cmと不定形である。

SB02 (第5図)

SB01の東の桁中央ピットを中心に三方をほぼ一間ずつ拡張したかっこうのかなり大き



第6図 SB03 実測図 ($S = \frac{1}{80}$)

な建物と思われる。規模は桁行4間の14m、梁行2間7.5mである、柱穴は直径18cm～35cm、深さ18cm～35cmとばらつきがある。なお、南の柱穴付近に45cm×30cm大の風化した花崗岩が2個確認されたが遺構との関連は不明である。

S K01

S B01の中央からやや北寄りで検出された、幅64cm、長さ80cm、深さ27cmの土坑で、埋土は大半が黄褐色砂質土の地山風化土で遺物は認められなかった。S B01、S B02、あるいはS B04等の建物に伴う遺構か否かは不明である。

S B03（第6図）

この調査区の中でもっとも東よりの位置にあり、桁は磁北よりやや西に寄っている。桁行3間の7.6m、梁行1間4.2mで桁行の柱穴間隔は最短1.8m、最長3.1mと大きな差があるが、置き石等で補強したことと考えられる。また、S B03の北側に石列が確認された。しかしその性格については不明である。

S B04（第7図）

桁行3間の12m、梁行は東西で柱穴の配置に相違が見られるため判断しにくいが2間ないしは3間で7.4m、柱穴は直径48cm～90cm、深さ20cm～64cmと他の遺構と同様不揃いの堀立柱建物と考えられる。

西側加工段

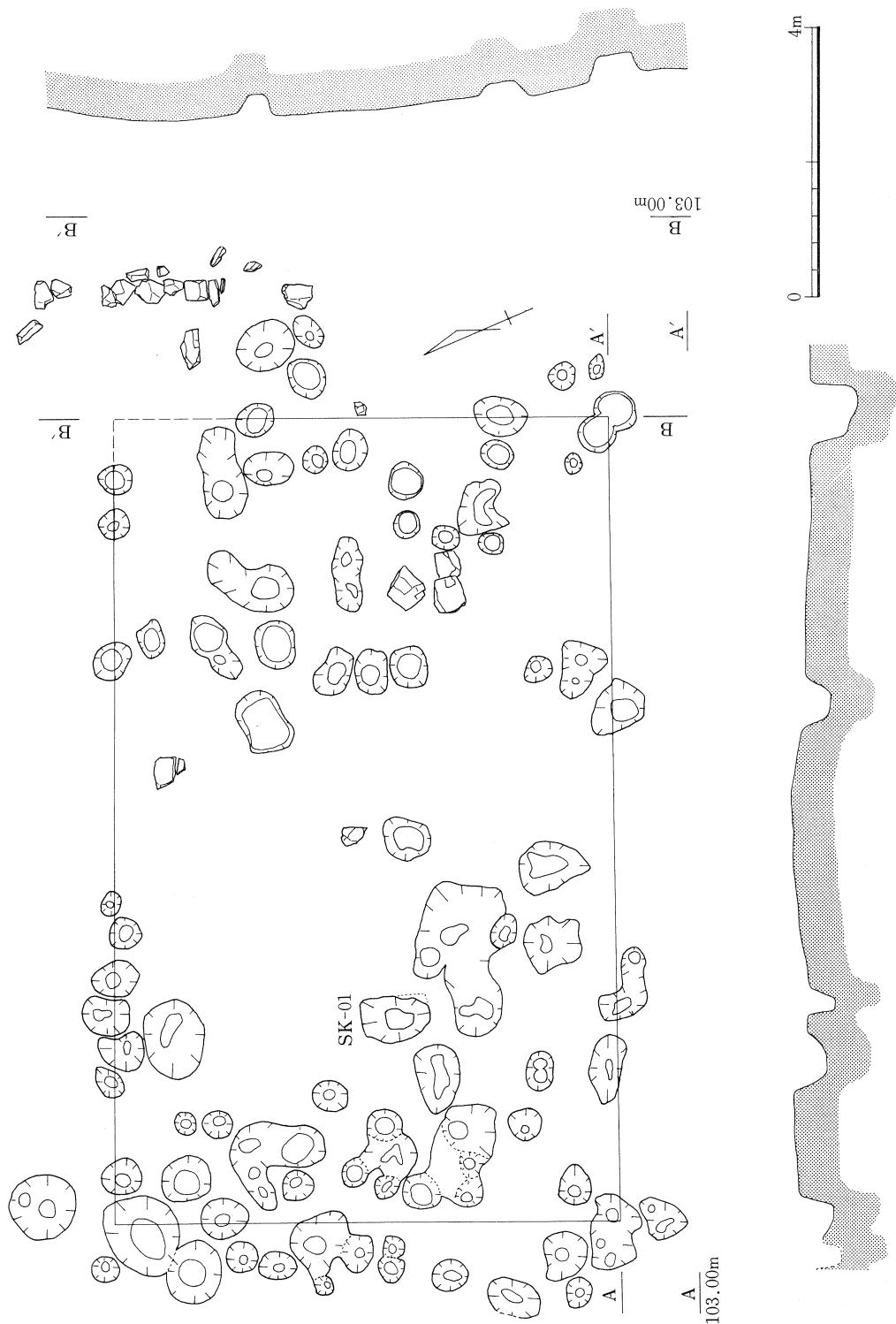
東西8m、南北9mの平坦面で南側はやや緩やかな斜面だが北側は調査区を境に急峻な斜面となっている。また西側は徐々に下降しながら支尾根の端部につながっている。

S K02（第8図）

上部が縦120cm、横108cm、底部が縦105m、横85mの土坑である、埋土は炭化物の混じった黄褐色の砂質土一層で土坑内から完形を含む中世の土師質土器が出土した。完形の土師器のいくつかは地面に伏せておかれた状態で出土し、埋土の上に長方形型の石が置かれている。

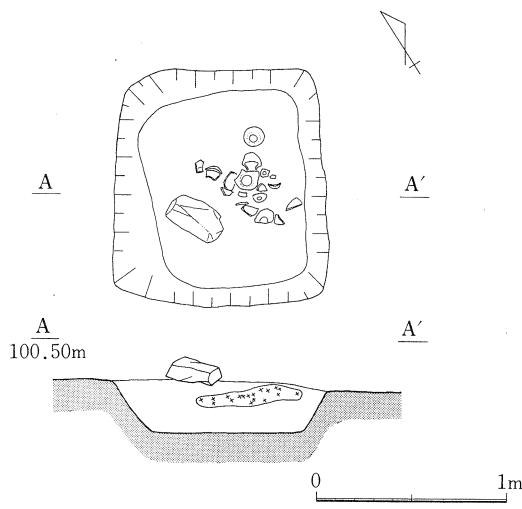
S B05（第9図）

ピットの並びを確認したのみであり、堀立柱建物ではない可能性もある。柱穴は直径40cm、深さ16cm～24cmで1間も1.6m～2.5mと差があり、あるいはA A' のピットは柵列



第7図 SB04 実測図 ($S = \frac{1}{100}$)

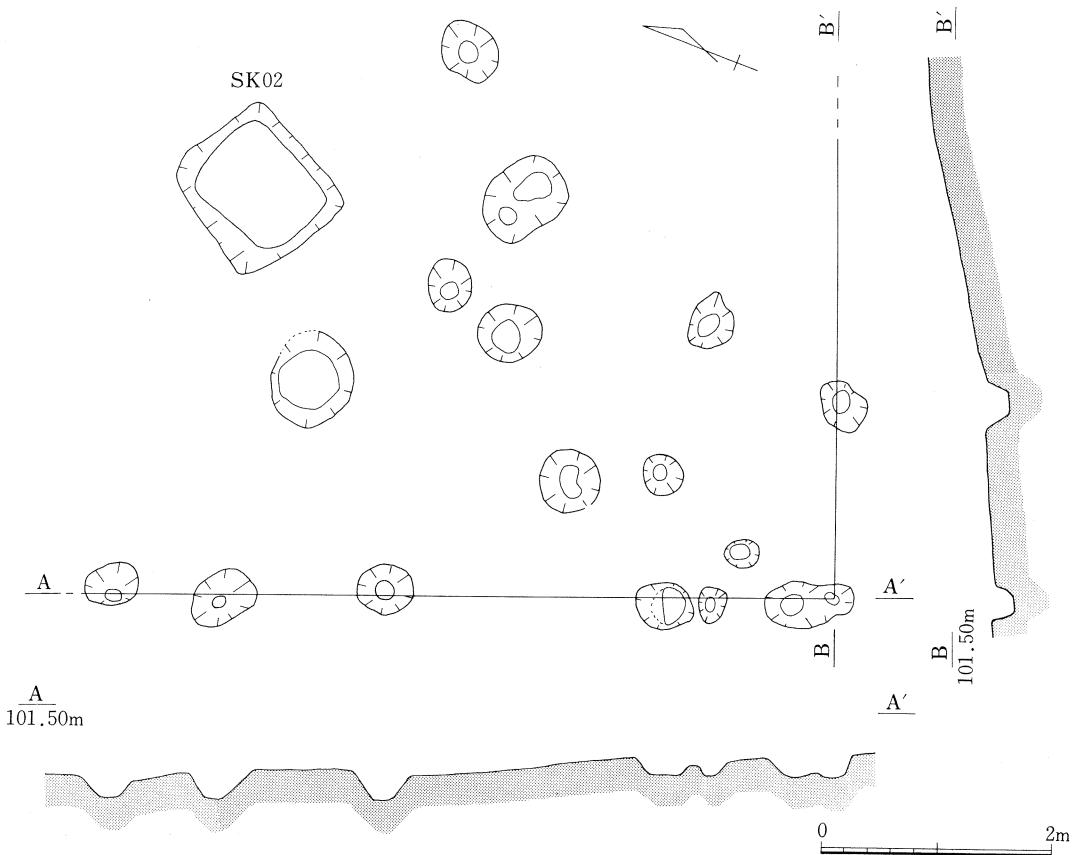
の可能性も残される。



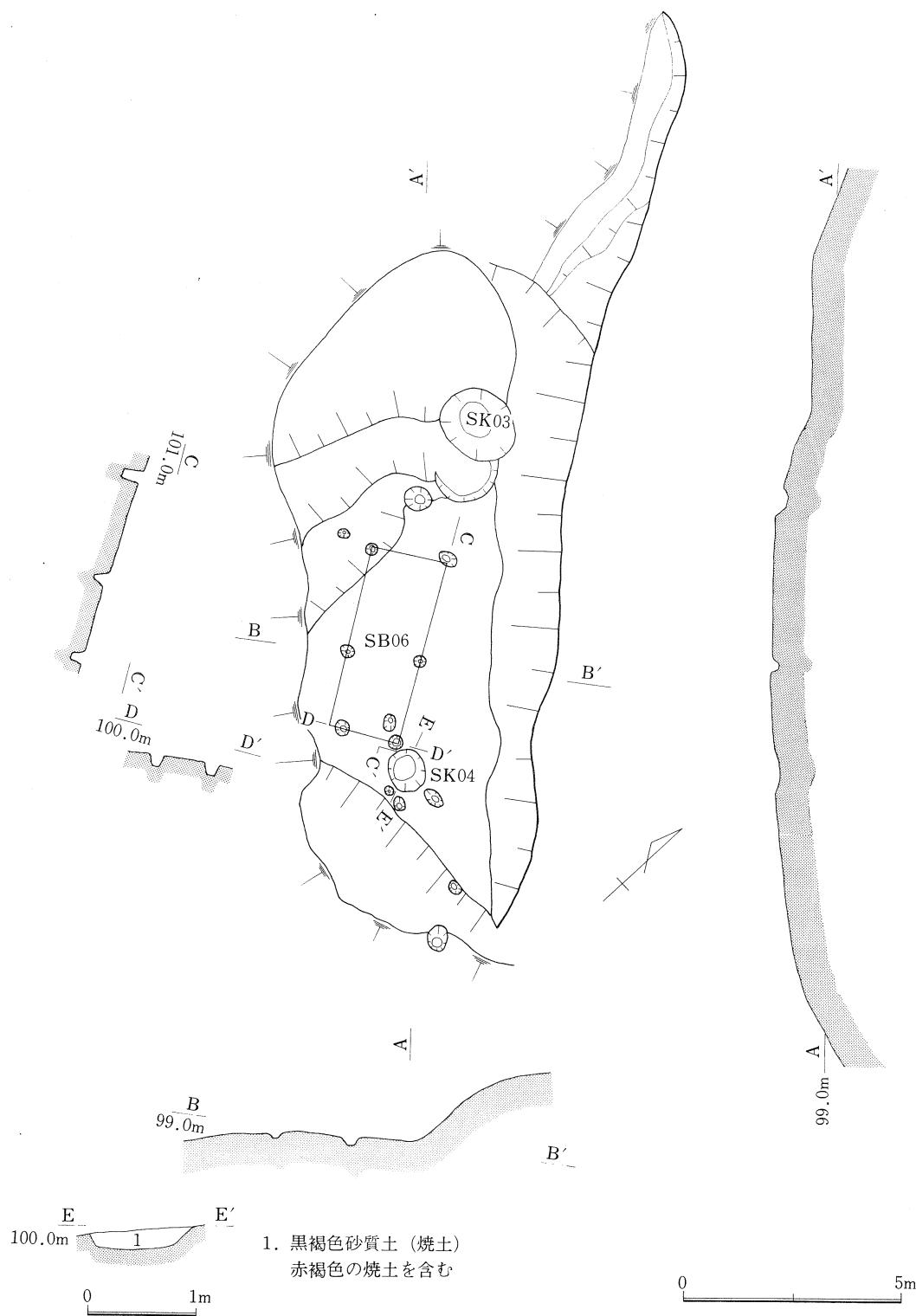
第8図 SK02 実測図 ($S=1/40$)

南側加工段

支尾根の南側山腹斜面を削り取って平坦面としているが、規模は東西11m、南北5mと南向きの細長い加工段で西側は二段にわたって緩い傾斜が見られる。この地区は地山の上に約60cmの黄褐色砂質土が堆積しており、多数の土器片、あるいは鉄器、鉄滓が混入して遺物包含層を成していた。遺構としては堀立柱建物、焼



第9図 SB05 実測図 ($S=1/60$)



第10図 南側加工段遺構配置図 ($S = \frac{1}{150}$ SK04断面 $S = \frac{1}{30}$)

土土坑、土師器が大量に埋納あるいは廃棄されたと思われる土坑が検出された。

S B06

桁行2間4.3m、梁行1間1.7mの堀立柱建物と考えられる。

S K03

地山を円形に掘り込んだ上部1.8m×1.5m、底面85cm×65cm、深さ80cmのだ円形土坑で埋土は炭化物を含んだ淡黄褐色砂質土の一層であった。土坑内からはS K01

と同様、完形を含む多くの土師器が重ねて伏せて置かれた状態で出土している。これらの土器は土坑内にまとめられて入れられたのではなく、木炭片を含んだ砂質土と一緒に長期にわたって埋められたものではないかと考えられる。

S K04

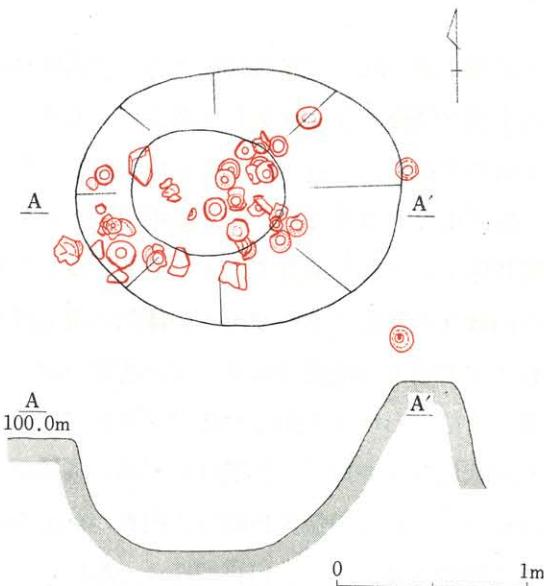
S B06の東から検出された上部の径約1m×85cm、底面の径約70cm×60cm、深さ18cmのやや楕円形をした焼土土坑である。遺物は確認されなかったがこの地区から鍛冶滓（碗型滓）が出土しているが関連遺構かどうかは不明である。

第2節 遺 物

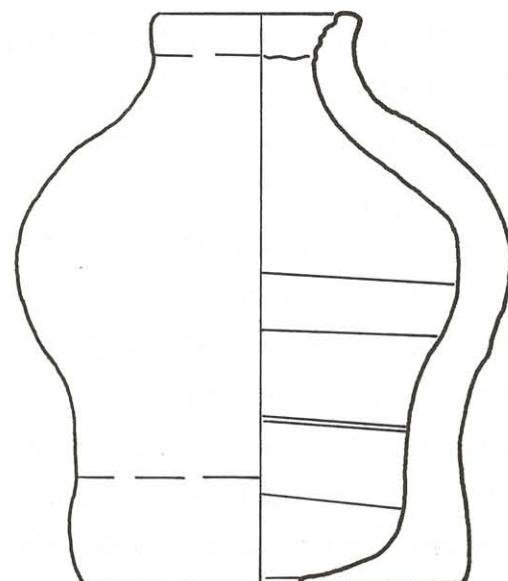
妙見山遺跡からは灯明皿をはじめとする中世の土師器を中心として須恵器、鉄釘等の鉄器、鉄滓等が数多く出土した。以下、地区ごとに記すことにする。

頂上建物群 土器（第12図、13図）

第12図は頂上部地山風化土の淡黄褐色砂質土から出土した、土師器の小型壺で口径2.7cm、器高7.6cm、底径5.3cmを測る。体部は回転ナデで内面には回転による条痕がみられ、肩部内面は手



第11図 SK 03遺物出土状況 (S=1/40)

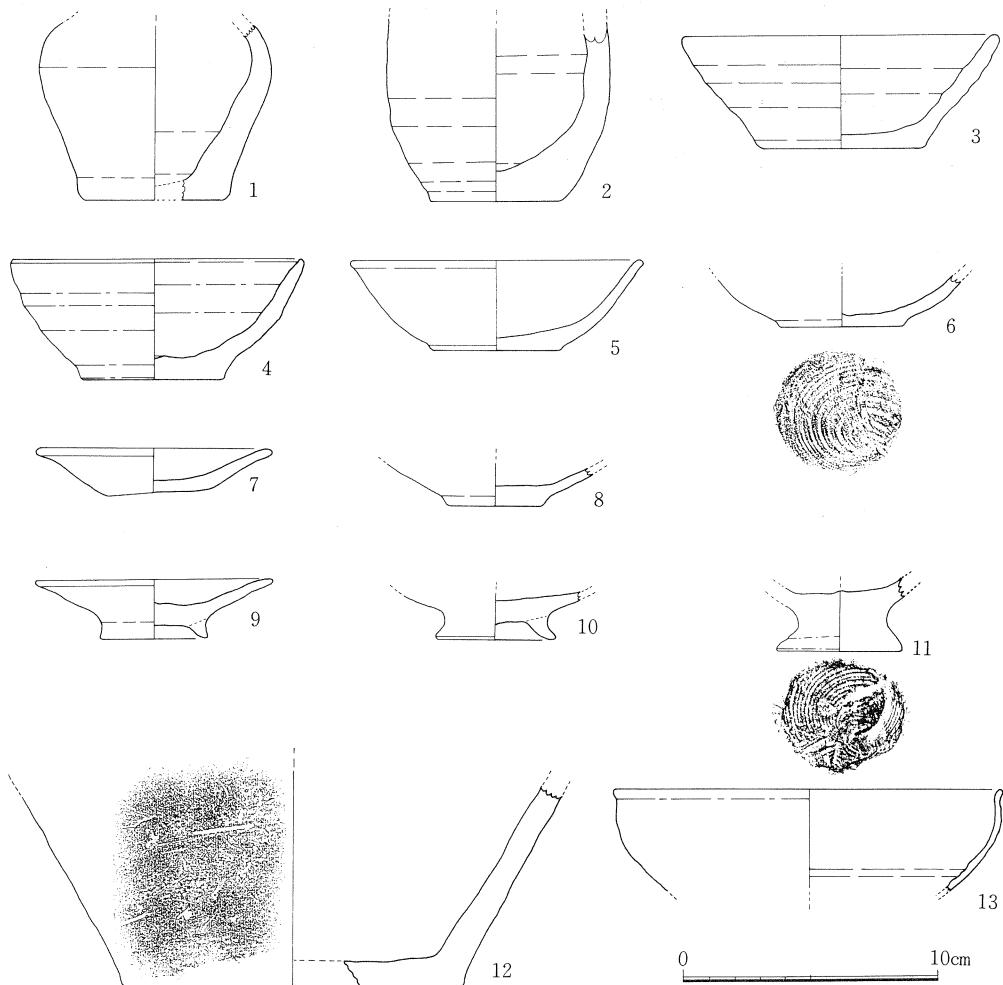


第12図 土師器 小壺実測図 (S=1/4)

ナデ調整が施される。底部はヘラ切りで器壁が中心部になるほど薄く西側から出土した数例の土器と同様に穿孔が施してあることも考えられる。

胎土はやや粗く、1mm前後の微砂粒を含む。色調は浅黄橙色である。形態から判断して日常の生活用具とは考えにくく、祭祀用具として使われたことが想像される。

第13図1、2も土師質土器で小型壺の類いと考えられる。1は体部の一部のみ出土しており口縁部の形状は不明であるが体部の復元径は9cm、底径6cmとみられる。内外面とも回転ナデで胎土は緻密である。2は器壁が厚く重量感のある壺である、下半部のみ残存しており上部の形状は不明だが体部の外径は9cm、底径5cmを測り、底部内面は回転ナデにより碗状になっている。色調はやや暗い茶褐色で2mm前後の砂粒を多く含んでいるため胎土は粗い。これらの使用目的は不明だが前述の小型壺と同様祭祀器具の可能性も伺える。3は土師器の坏である、口径12.7cm、器高4.5cm、底径6.7cmを測る。底部外面はヘラ切りで体部はわずかにふくらみをもたせながら直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。調整は体部が回転ヘラ削りの後内外面とも回転ナデを施す。色調は淡黄白色、胎土は密で水酸化鉄の細粒を含み、体部内面には稻ワラ状の植物茎が1条見られる。焼成は良好である。4も土師器の坏である、口径11.4cm、器高4.9cm、底径5.7cmを測る。底部に厚みをもたせて内湾ぎみに外上方に立ち上がり、口縁部には一部ふくらみが施されている。底部外面はヘラ切りの後ナデ、体部は回転ナデを施す。色調は淡い肌色を呈し、胎土はやや粗く焼成は良好である。5、6は碗形の坏と考えられる。5は復元口径11.7cm、器高3.6cm、底径5cmを測る。底部には糸切り痕がみられ体部は回転ナデによって内湾ぎみに上外方に伸び、口縁端部はわずかに外反する。色調は黄土色、胎土は密で水酸化鉄の細粒を含む。焼成は良好である。7、8は土師器皿である、7は口径9.3cm、器高2cm、底径4.2cmを測り、底部は糸切りで上外方に大きく展開し、口縁端部は外反しながら丸くおさめる。色調は黄土色、胎土は密で焼成は良好である。8は底部が残存するのみで底径3.8cmと小型であり、内面に指紋痕が認められる。9、10は高台付坏である、9は復元口径9.5cm、器高2.4cm、高台底径4.3cmを測る、高台内面は指頭で丸みがつけられ、体部は回転ナデにより上外方へ直線的に伸びて口縁部を丸くおさめる。色調は白黄色、胎土は長石を少量含み密で焼成は良好である。10は復元高台底径4.8cmで高台断面はハの字状を呈す、また底部外面には黒色塗彩がみられる。11は台付坏である、底径部は4.7～5cm、脚底部は糸切りの後一部にヘラ状のナデ痕がみられ、色調は淡黄茶褐色、胎土は緻密で重量感がある。12は須恵器の甕片で復元底径14cm、体部外面は回転ヘラ削りの後ハケ目が施され、直線的に立ち上がる。底部内面にもハケ目が入れられる。13は須恵器の坏身である、復元口径は15.5cm、器厚は薄くほぼ2mmにそろえられ底部から上外方に斜行した後直線的に立ち上がり、



第13図 頂上建物群出土土器実測図 (S-13)

口縁端部を外反させる。色調は暗青灰色、胎土は緻密で焼成は良好である。

鉄器（第14図）

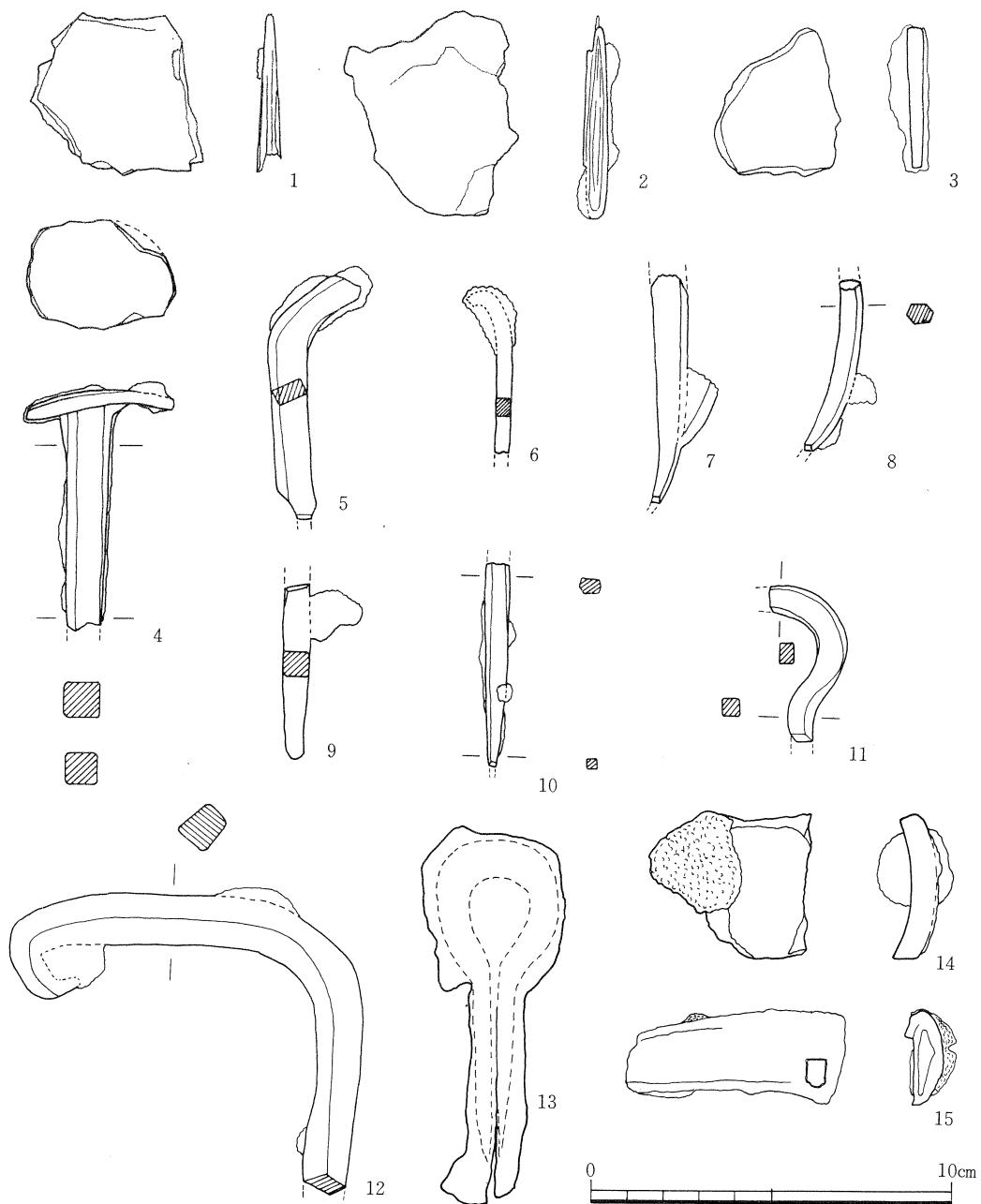
鉄器もほぼ調査区全体から出土しており、特に頂上建物群、西側加工段に多い。器種は鉄釘が大半を含め、小片については図化を省略した。

1、2はいずれも板状の鍛造片で1の断面両端部の厚さは2mmと6mmを測り、一方が鋭角になっている。2についてもほぼ同じ形態で鉈状の刃物と考えられる。3は断面端部の厚さ5mmと3mmの板状鍛造片であるが用途は不明である。4～10は角釘と思われる。11、12はそれぞれS字型、くの字型に曲げてあり、用途は不明である。13は両端を尖らせた角型の鉄材を折りまげたもので用途は明確でないが木材を牽引する際に使われたものとも考

えられる。14はやや丸みを帯びた厚さ6mmの鉄片で用途は不明である。15は断面を見ると刀身のようにも見えるが外周もすべて金属であり、用途は不明である。

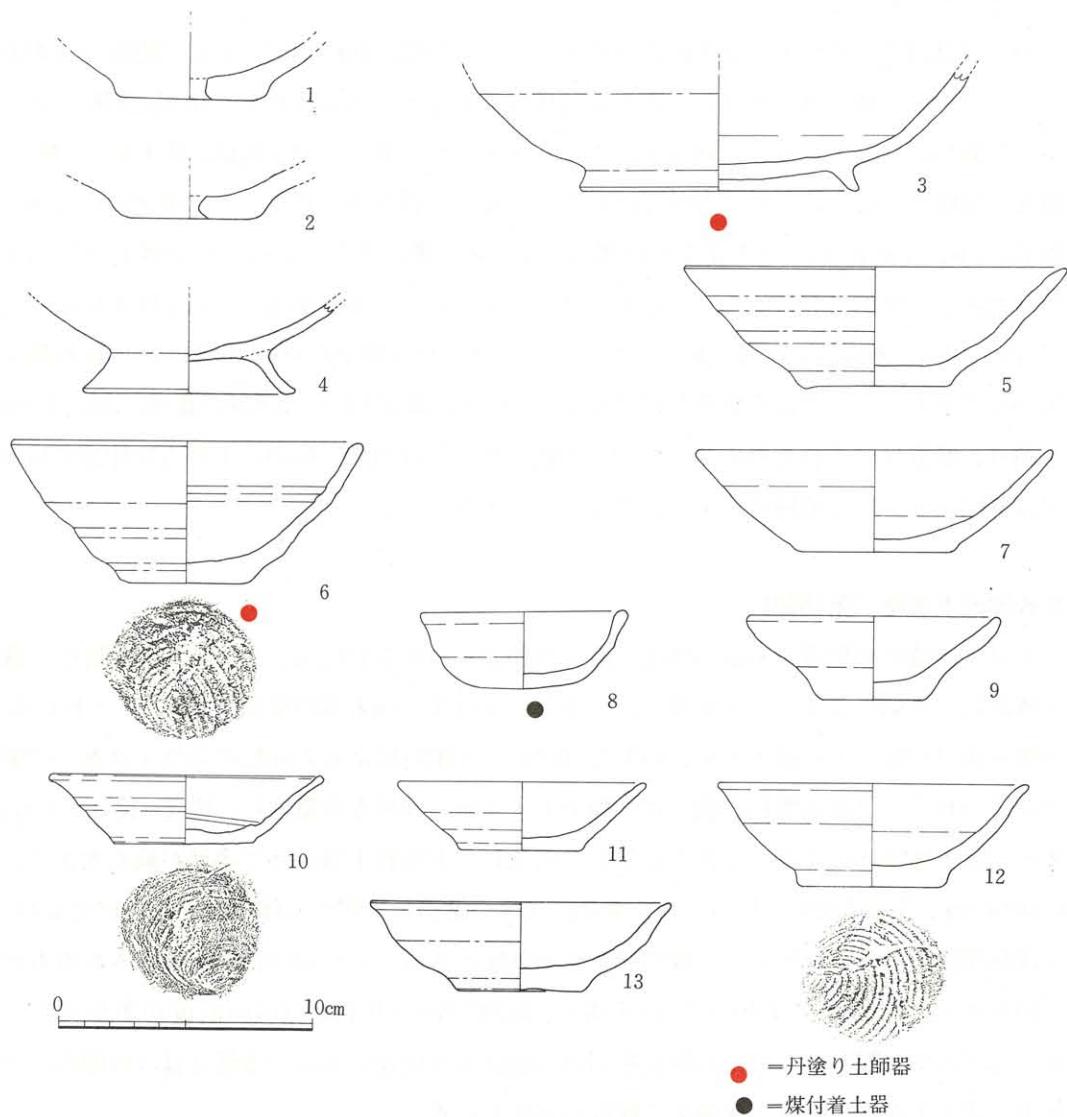
西側加工段 出土土師器（第15図）

1、2は底部が $\frac{1}{2}$ 残存するのみで器種は不明である。1は復元底径5.8cm、底部中央に



第14図 頂上建物群出土鉄器実測図 (S= $\frac{1}{2}$)

は直径1cmの穿孔が認められる。色調は淡黄茶褐色、胎土は密で1mm前後の微砂粒、水酸化鉄の細粒を含む。焼成は良好である。2も底部に直径6mmの穿孔が施され、復元底径は2.7cmを測る。色調は黄茶褐色、胎土は密で1mm大の砂粒を含む。焼成は良好である。3、4は高台付坏である。3は復元底径11.2cmを測り、脚部は回転ナデによって直線的に下外方に伸び、端部を丸くおさめる。底部内面には暗文がみられ、体部は内湾ぎみに立ち上がる。また内外面とも赤色塗彩が施される。胎土は微細で焼成は良好である。4は復元底径8.5cmを測る。坏の底部を糸切りで切り離した後、坏底部をややすらして高台が取りつけられ、接合部の一部にヨコナデが施される。脚部は器厚が比較的薄く、ハの字状に大きく



第15図 西側加工段出土土師器実測図 (S=½)

広がり脚端部は外反する。色調は黄白色、胎土は密で焼成は良好である。5、6、7は坏である。いずれも底径に対して口径が大きく体部は回転ナデにより、わずかなふくらみをつけて立ち上がり、口縁部内面を外反させる。5は底径5.5cmで糸切り痕がみられる。6は底径5.5cmで静止糸切り、7は底径6.3cmを測り、ヘラ切りの後、手ナデが施される。また、色調は5が橙色ないし黄褐色、6は黄白色の地に赤茶色の塗彩が見られ、7は黄土色である。胎土については5はやや粗く1～3mmの砂粒、長石、石英を含む。6は微細で1mm前後の砂粒、石英を少量含む。7は密で1mm前後の砂粒を少量含む。焼成では6が良好で5.7は不良である。なお5の坏はほぼ完形であるが、体部の一部はSK02の土坑上層から出土している。

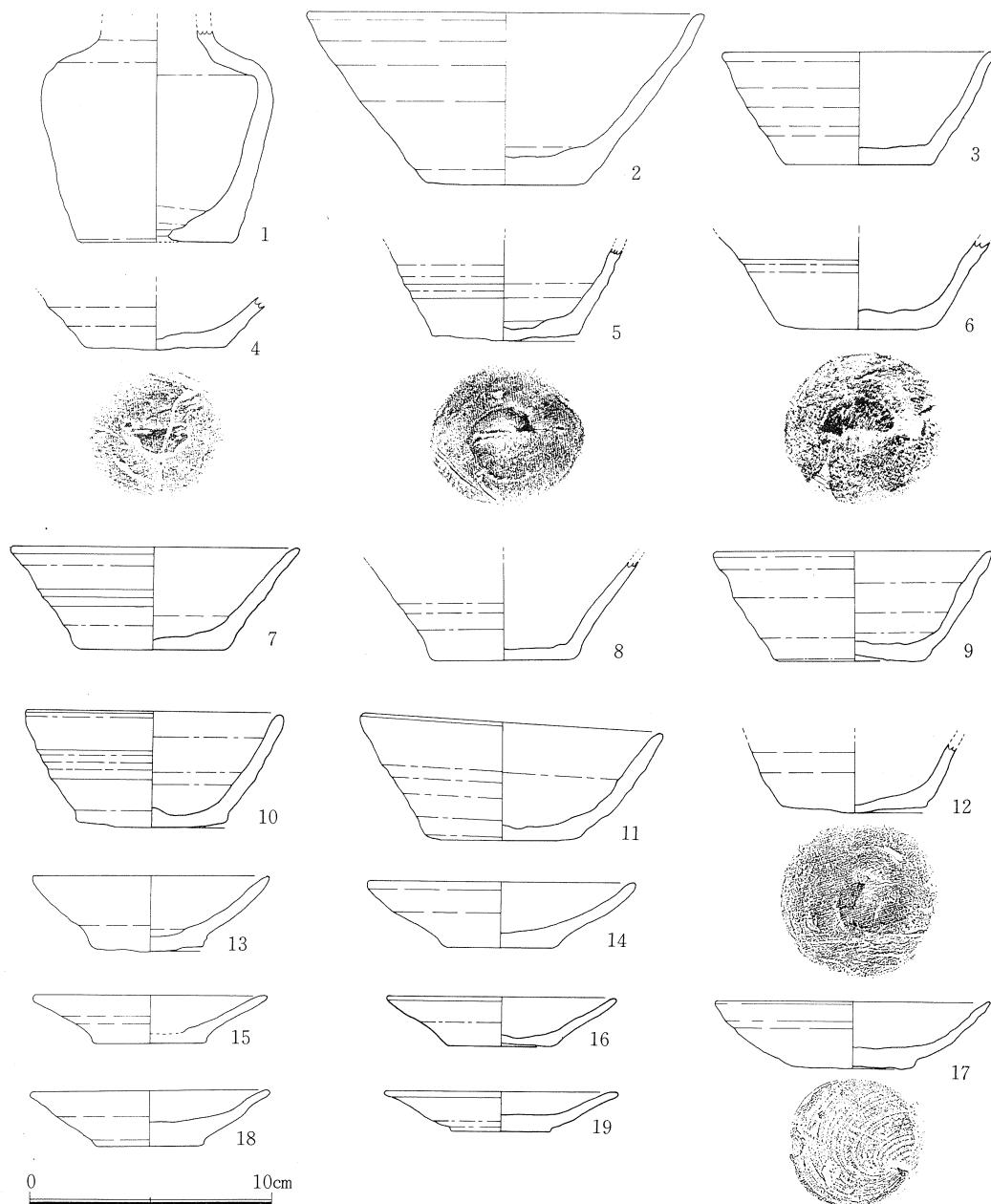
8～11は容量のやや小さい土師器坏である。8は口径8.4mm、器高3.2cm、底径5.2cmを測る。底部の切り離しはヘラ切り、底部には指頭によるナデがみられる、体部は回転ナデにより、鍋型に立ち上がり、口縁端部にふくらみをもたせる。色調は肌色、胎土はやや粗く、焼成は良好である。体部には内外面にわたって煤の付着がみられる。9は復元口径12cm、器高3.3cm、復元底径4.3cmを測る。底部はヘラ切りの後、手ナデとみられ上外方に立ち上がったあと、体部外面にふくらみをもたせて口縁部を丸くおさめる。10.11はそれぞれ口径1cm、10cm、器高2.8cm、2.8cm、底径5.5cm、5cmを測る皿型の坏で底部はいずれも静止糸切りである。12、13はそれぞれ口径12.5cm、12cm、器高4.1cm、3.6cm、底径5.7cm、4.9cmを測り、底部はいずれも静止糸切りで、回転ナデにより内湾しながら上外方に伸びて口縁部は外反する。12は薄鈍色を呈し、焼成不良である。

SK02出土遺物（第16図）

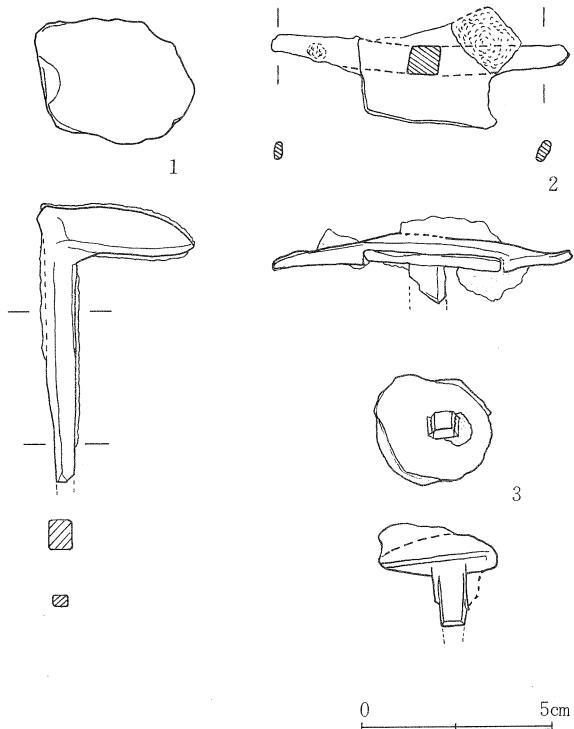
1は土師器の小型壺である。体部の最大径10.2cm、残存高9.2cm、底径6.5cmを測り、底部外面はヘラ切りの後、ナデが施され中央部には直径1cm未満の穿孔があったと思われる。体部外面は回転ナデの後手ナデ、内面には回転ヘラ削りによる右回転のらせん状巻上げ痕が認められる。色調は肌色、胎土は微細で1～2mmの砂粒を少量含む。焼成は良好である。2～12は土師器坏である。2は当遺跡から出土した土師質土器の坏で容量が最も大きく、口径15.5cm、器高7.2cm、底径6.7cmを測る。底部の調整は不明だが体部は回転ナデにより、ほぼ直線的に上外方に伸び、口縁内部をやや外反させる。3～12は口径が確認されるもので10.8cm～12.4cm、器高4.3cm～4.7cmを測り、底径5.8cm～6.7cmで6.4cm前後が多かった。また底部の切り離しは3のみが静止糸切りで他はヘラ切りである。体部はほぼ直線的に上外方に立ち上がる。10は口縁端部に縁取りが施される。

13～19は皿、ないしは碗形の土師器坏である。13、14、17は口径10.5cm～11.5cm、器高

2.5cm～3.2cm、底径4.6cm～5.4cmを測る。13、17の底部にはキメの細かな糸切り痕がみられ体部は回転ナデにより、内湾ぎみに上外方へ立ち上がる。仕上げはやや雑である。15、16、17、18、19は口径9.7cm～10cm、器高1.7cm～2.3cm、底径4.1cm～4.8cmを測る。底部は回転糸切り、体部は回転ナデにより直線的に上外方へのび、口縁部はやや外反する。色調は明灰黄色、胎土は密で焼成は良好である。



第16図 SK 02出土土器実測図 (S=1/3)



西側加工段 鉄器 (第17図)

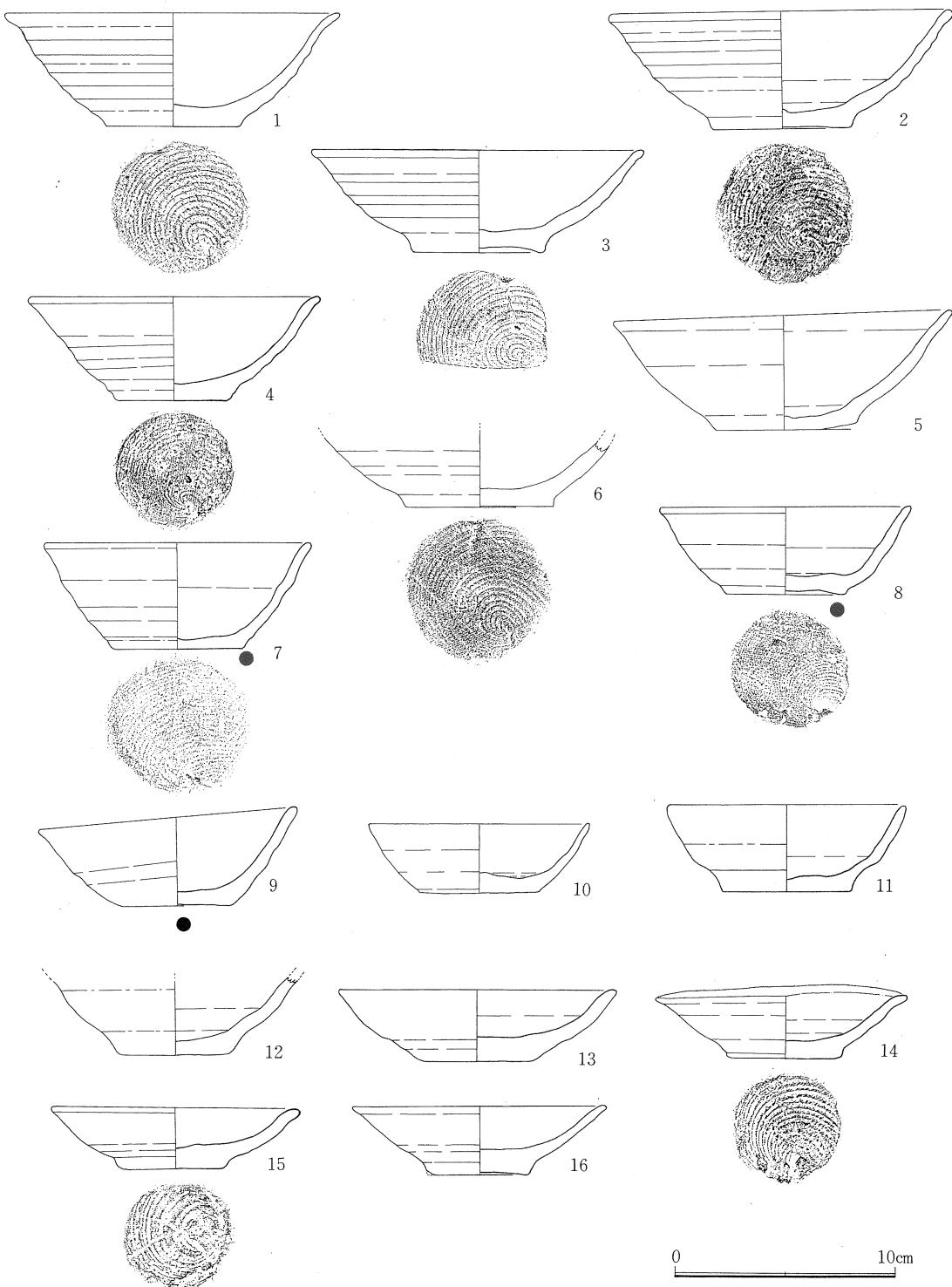
1は角釘である。残存する釘の長さは7.3cmを測り、3.3cm × 4cmの扁平な釘頭をもつ。2は3種類の鉄器を接合したものと思われ、用途は不明である。3は飾り釘の頭部分と思われる。本遺跡からは合計3個の飾り釘が出土した。

第17図 西側加工段出土鉄器実測図 (S=½)

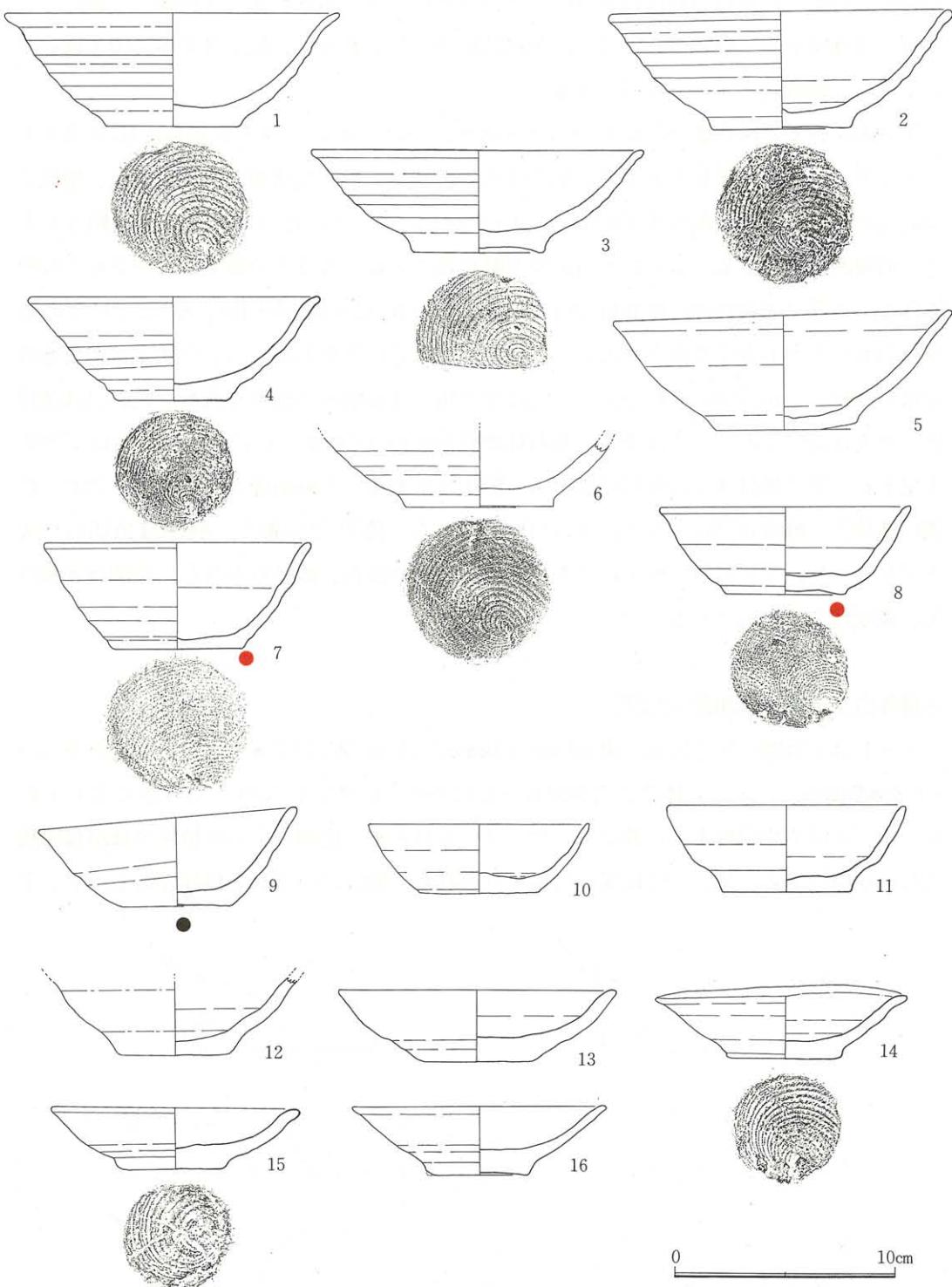
南側加工段出土遺物

S K03出土土師器 (第18図、19図)

第18図1～6は碗形坏である。口径13.3cm～16.0cm、器高4.7cm～5.4cm、底径5.2cm～6.8cmを測り、底径に対して口径が大きくなっている。底部の切離しはすべて回転糸切りで体部は回転ナデにより、内湾ぎみに上外方へ伸び口縁部は外反する。色調は明黄褐色、胎土は密で焼成は良好である。なお、3はちょうど半分に割られた状態で土坑内から出土した。7、8の坏は土坑最下部に伏せて置かれた状態で出土した。口径はそれぞれ12.2cm、11.6cm、器高4.9cm～4.0cm、底径6.2cm、5.4cmを測る。底部の切離しは7が静止糸切り、8が回転糸切りである。体部は回転ナデによりわずかに内湾して上外方に立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。色調は黄白色である。胎土は密で焼成は良好である。9～12は土師器のやや器高の低い碗形坏である。12を除いて復元口径10.2cm～11.9cm、器高3.2cm～4.0cm、底径5.3cm～6.0cmを測る。11、12の体部は回転ナデにより上方に立ち上がった後、さらに上外方に伸びる。色調は10、11が明黄褐色、9、12は黄橙色で9には煤及び植物纖維体の付着がみられる。胎土は11が密で12は粗く石英、雲母、水酸化鉄の細粒を含む。10は密であるが3mm以下の砂粒を若干含む。焼成はいずれも良好である。13～16は皿形坏である。口径11.2cm～12.8cm、器高3.0cm～3.3cm、底径4.8cm～5.4cmを測る。10、13、14、15は回転



第18図 南側加工段SK03出土土器実測図(土師器)(1) (S=1/3)



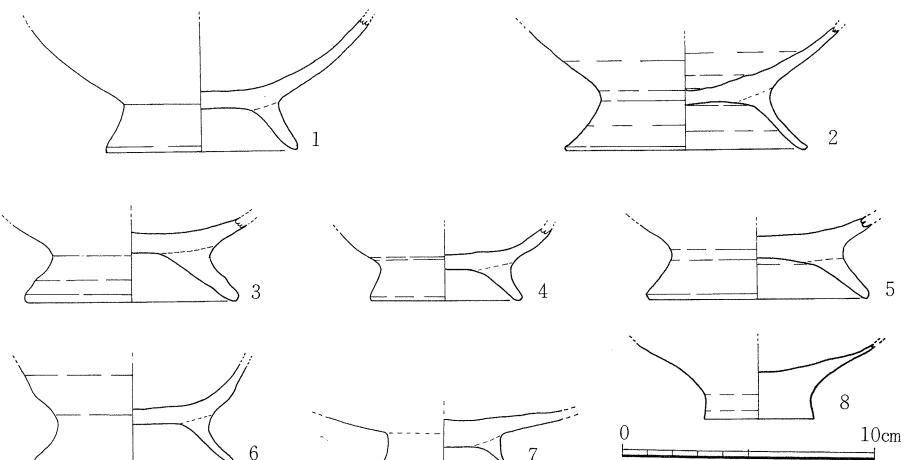
第18図 南側加工段SK03出土土器実測図(土師器)(1) ($S = \frac{1}{3}$)

糸切りである。いずれも底部器厚は厚く体部は回転ナデによりわずかに内湾して斜行し、口縁部は外反する。色調は10、13、14が明黄褐色、15が乳黄色、胎土はすべて密で砂粒を若干含む。焼成はいずれも良好である。

第19図1、4は高台底径7.8cm、6.1cmを測り、ハの字状に下外方に斜行し脚端部を丸くおさめる。体部は碗状を呈する。胎土は密で色調はそれぞれ淡黄白色、黄橙色、焼成は良好である。3、5は高台底径8.5cm、9.0cmを測り、1、4に比べてやや高台の傾きが大きく直線的に斜行する。3の胎土は密で水酸化鉄を含む。5はやや粗く2mm～3mmの砂粒を含む。色調は浅黄橙色。焼成は良好である。2、6は高台底径9.4cm、8.0cmで体部の器厚に合わせ高台も薄く外向きに広がる。体部は上外方に立ち上がる。2の胎土は密で水酸化鉄の細粒、2mm前後の砂粒を含み、6はやや粗く2mm前後の砂粒を含む。色調は浅黄橙色。焼成は良好である。7は皿形の高台壺で高台底径は4.8cmと小型で高台断面は三角形を呈する。受け部は浅く直線的に広がる。胎土はやや粗く1mm前後の砂粒を多く含む。色調は黄橙色。焼成は良好である。8は台付皿である。底径4.2を測る。底部は糸切りの後ナデが施され、ていねいな仕上げである。胎土は密で長石、微砂粒を含む。色調は乳黄白色、焼成はやや不良である。

遺構外出土土器（第20図～23図）

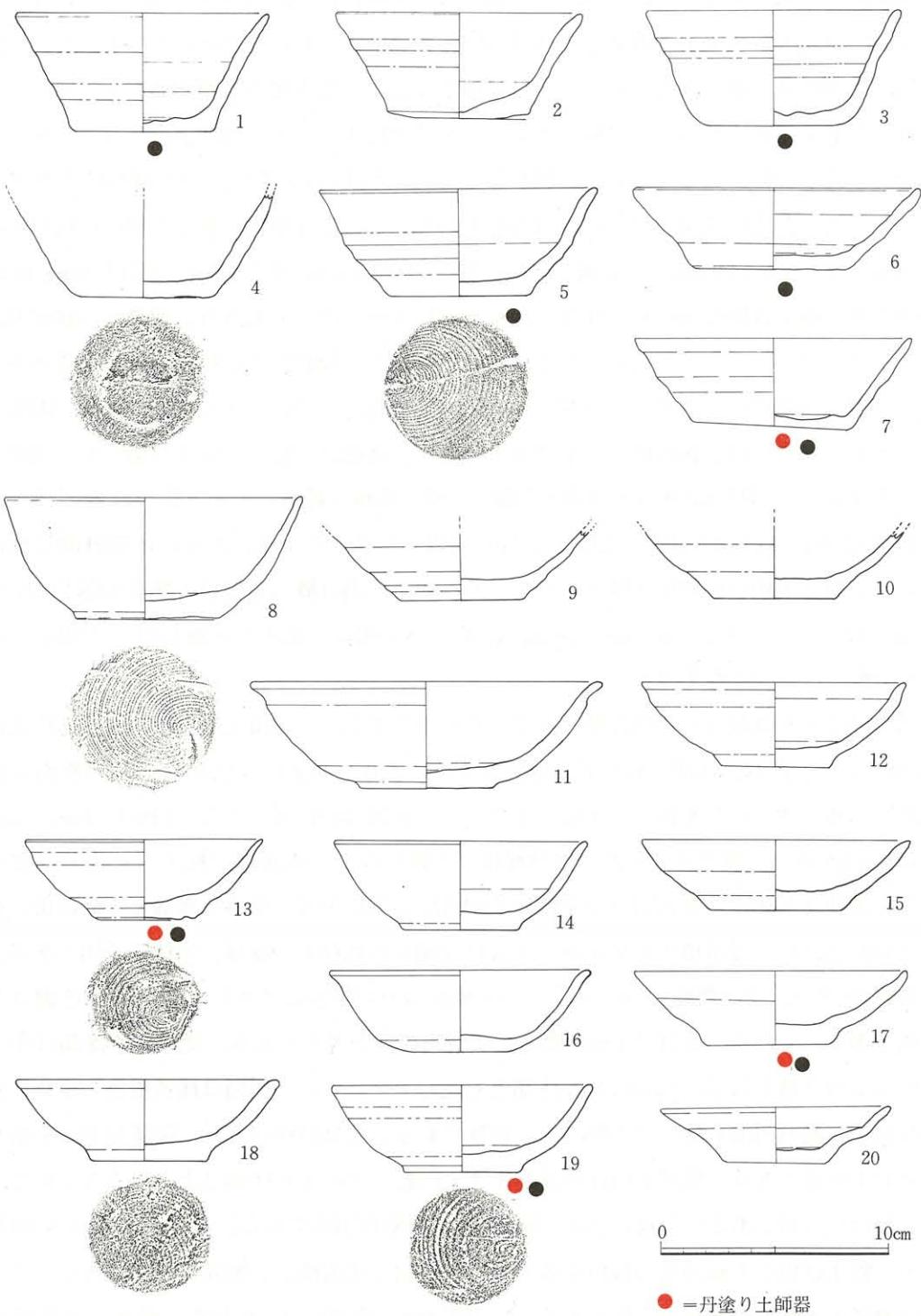
1～5は土師器の杯である。復元口径11.0cm～12.4cm、器高4.7cm～5.2cm、復元底径6.0cm～6.8cmを測る。1～3の体部は直線的ないしはわずかに外反しながら上外方に立ち上がり、4、5はやや内湾ぎみに伸びる。胎土はいずれも密。色調は2が赤橙色のほかは灰褐色ないし橙色で1、3、5には煤の付着がみられる。焼成はいずれも良好である。6、7



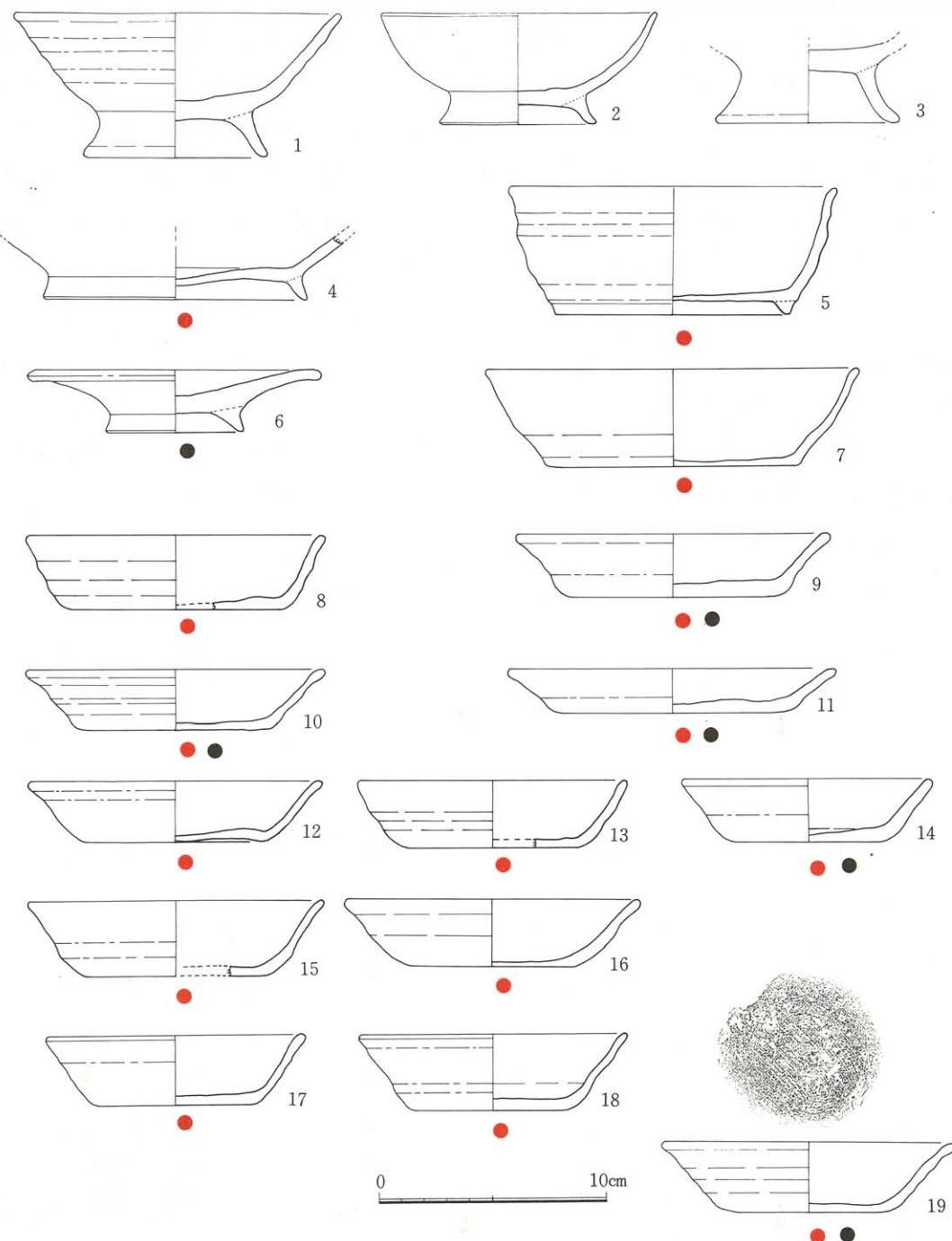
第19図 南側加工段SK03出土土器実測図(2) (S=1/3)

は器高のやや低い杯で口径12.6cm、12.3cm、器高3.6cm、4.1cm、底径6.8cm、7.0cmを測る。底部はヘラ切りの後ナデが施され、体部は回転ナデにより逆ハの字状に立ち上がる。胎土は密。色調は6が淡赤褐色であるが7は黄橙色の胎土に暗赤褐色の塗彩痕がみられる。また煤の付着も認められる。8は碗である。体部は回転ナデにより内湾ぎみに立ち上がるが整形時に力が加わったとみられ、口径が13.2cm×推計14.5cmと変形しやや雑な仕上がりとなっている。胎土は浅黄橙色。焼成は良好である。9、10は風化が著しく杯の形状は不明である。底径5.4cmを測る。11は碗である。復元口径15.7cm、器高4.8cm、底径5.9cmを測る。底部の切り離しは回転糸切り。体部は回転ナデにより内湾して上外方に伸び、口縁部外面をくぼめてアクセントを付ける。胎土は粗く3mm以下の砂粒を含むほか多量の金雲母を含む。色調は浅黄橙色である。12～14、16、18、19は器高が3.6cm～3.9cmとやや低い碗形の杯である。底では14、16を除いて糸切りで離され、体部は回転ナデにより緩やかに内湾して立ち上がる。口径は10.6cm～11.6cmを測り、同一規格の範疇に入ると思われる。15、17は口径12.0cm～12.3cmを測る。13、17、19には煤の付着がみられ、さらに体部外面は底部も含め、暗赤褐色の塗彩痕が残る。胎土はやや粗く色調は概ね黄橙色。焼成は良好である。20は小形の皿で口径12.0cm、器高2.6cm、底径4.8cmを測る。底部切り離しはヘラ切り。体部は回転ナデだが不整形である。

第21図1～6は高台付の各器種を図化したものである。1は復元口径14.3cm、高台底径8.1cmを測り、高台、体部とも内外面は回転ナデによりハの字状に広がる。高台断面は直線的である。胎土はやや粗く、黄橙色を帯びる。2は高台付碗である。口径12.1cm、高台底径7.0cmを測り、碗底部と高台の接合部にはき裂が入る。体部は回転ナデにより均整のとれた碗状を呈する。高台はハの字状にやや外反して広がる。胎土は微細で1mm前後の水酸化鉄粒を含む。浅黄橙色を呈する。3は高台部のみ残存し、器種、形状は不明である。高台底径8.2cm、受け部高3.2cmを測る。高台断面はハの字状に外反して広がる。色調は黄橙色である。4は復元底径11.6cmを測る。供膳用の器と考えられる。受け部の器高は中心部になるほど薄くなる。高台は短く体部とも回転ナデによる。色調は浅黄橙色の極めて微細な胎土に高台内面を除いて赤色の塗彩が施される。5は口径14.6cm、底径12.0cmを測る丹塗り土師器である。底径と口径の差が小さく回転ナデにより体部は上方に立ち上がる。6は高台付の皿である。口径12.9cm、器高2.8cm、底径6.0cmを測る。高台、体部とも回転ナデ、胎土は粗く1mm前後の砂粒を多く含む。色調は浅黄橙色。焼成は不良である。7は赤色塗彩の土師器で浅鉢形の杯である。口径16.6cm、底径11.2cmを測る。底部の切り離しはヘラ切り、体部は回転ナデで逆ハの字状に上外方に伸びる。底部、体部とも器厚が薄く最短部3mmを測り、胎土は微細である。



第20図 南側加工段出土土器実測図 (1) (S=1/3)



● = 丹塗り土師器

● = 煤付着土器

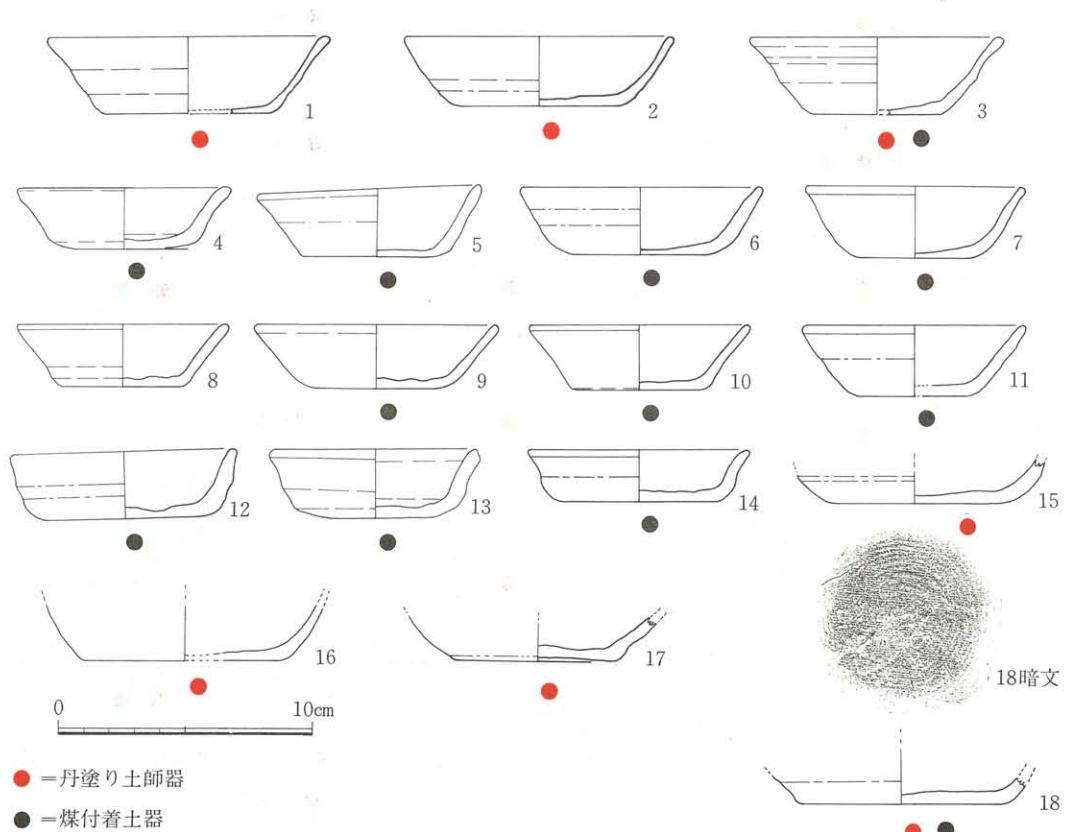
第21図 南側加工段出土器実測図 (2) (S=1/3)

丹塗り土師器について

第21図4、5、7に記したように本遺跡からは南側加工段及びその西方斜面を中心に遺物包含層から丹塗り土師器が出土した。その多くは小形の浅鉢状を呈した杯である。器種名では皿と表記されるが^①これらの土師器には主に次のような特徴が見出される。①形状は底部が平底で体部はほぼ直線的に立ち上がる。②器厚が最短部2mm～3mmと薄いものが含まれる。③胎土は微細で水酸化鉄の細粒を多く含み、砂粒等をほとんど含まない。④底部の切り離しはヘラ切りと思われ、底部平面は指頭による押さえによってやや起伏する^②。⑤大半の皿の口縁部に煤の付着が認められる。⑥体部は回転ナデである。このほか一部の底部に暗文、底部外周にヘラ痕が認められるものがある。なお、底径の小さい土師器については赤色塗彩がみられなくなることを付記しておきたい。この種のすべてを図化し得なかったが図化したものについては底径を中心に分類を試みた。またこの種の土師器の分類については形態的に共通しているため口径と底径に基づいて分類を試みた。

a. 復元底径が7.0cm以上あるもの。

第21図8～10、12～19は復元口径11.0cm～14.0cm、器高2.7cm～3.4cm、復元底径7.0cm



第22図 南側加工段出土土器実測図 (3) (S=1/3)

～9.6cmを測る。底部には指頭による押さえ、ナデが施される。9、10、14、19の体部には煤痕がみられる。また9、10、16、19の底部内面には暗文が認められる。11は口径14.6cm、器高2.0cmを測る。体部には煤、底部外周にはへら痕、また内面に暗文が認められる。

b. 復元底径が6.0cm～7.0cmのもの。

第22図1、2がこの範疇に入る。復元口径11.2cm、10.6cm、復元底径6.5cmを測り、赤色塗彩が施される。

c. 復元底径が6.0cm未満で体部が逆ハの字状に立ち上がるもの。

第22図3～11が相当し、復元口径7.7cm～9.6cm、復元底径4.6cm～6.0cmを測る。色調は浅黄橙色ないし橙色^③を呈し、3を除いて赤色塗彩はみられなくなる。反面全ての口縁部に煤の付着がみられる。

d. 復元底径が7.0cm未満で体部が直線的に立ち上がるもの。

第22図12～14は復元底径4.5cm～6.5cmを測る。器厚は比較的厚い。

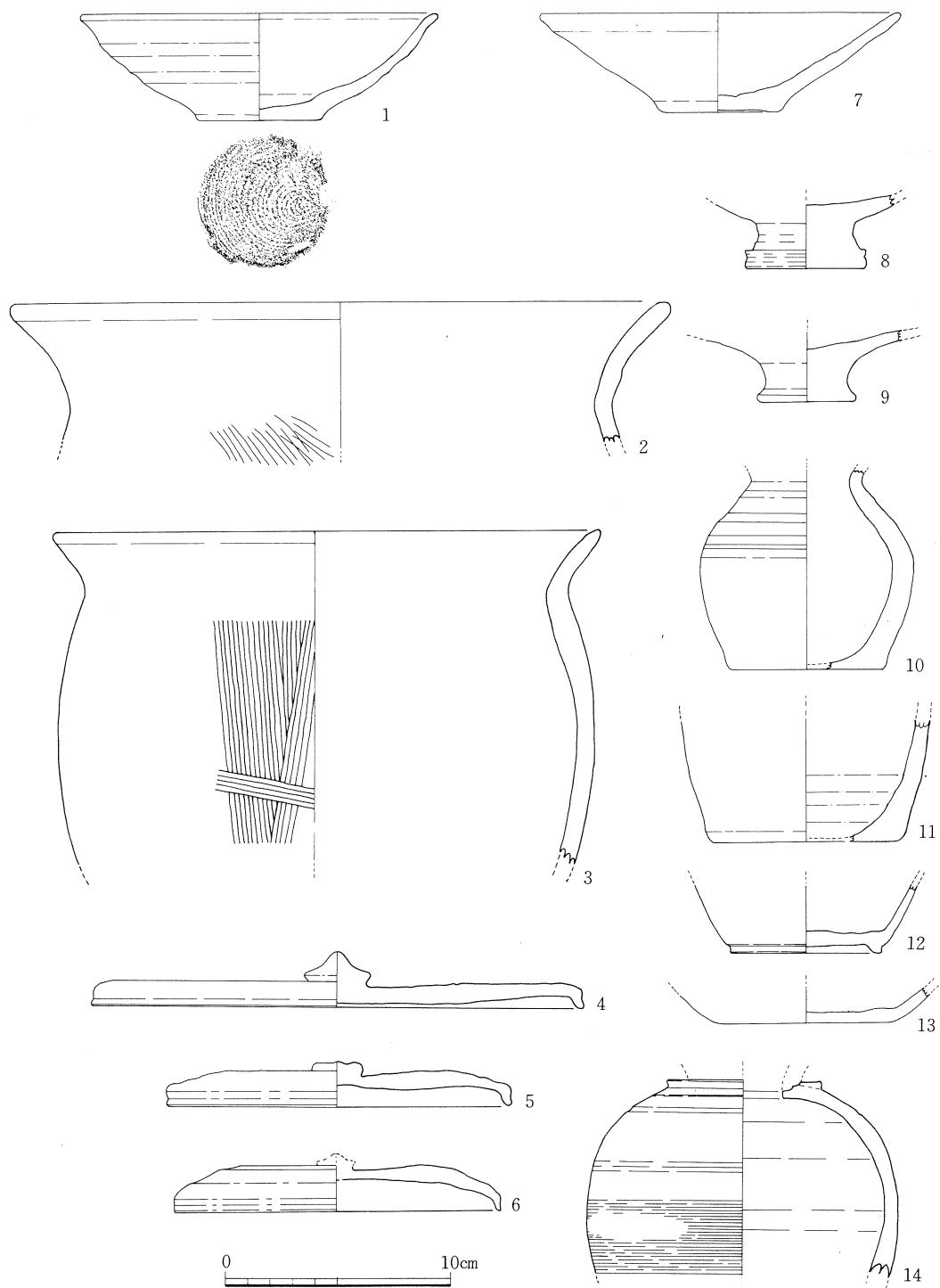
e. その他

第22図15～18で底径6.5cm～8.5cmを測る。底部のみ残存しており、その他としたがaまたはbに含まれることも考えられる。いずれも赤色塗彩が施される。特に17は彩色が濃く小豆色を呈する。18には煤及び暗文が認められる。

本遺跡から出土した遺物には日常の生活に供された遺物があまり見られなかつたが南側加工段からはいくつかの生活用具としての遺物が出土した。

第23図1、7は土師器の碗である。復元口径は15.9cmないし16.0cm、底径5.7cmを測る。底部切り離しは回転糸切り。体部は回転ナデにより上外方に大きく展開する。胎土はやや粗く、浅黄橙色を呈する。2、3は土師器甕で復元口径はそれぞれ29.4cm、24.3cmを測り、口縁部はくの字にゆるく外反し、体部は直線状になる。調整は口縁部の内外面はヨコナデ、体部内面はヘラケズリで外面は2がハケ目、3は縦方向の後斜め方向にカキ目が施される。体部全面にわたって煤が付着する。4～6は須恵器の杯蓋である。4は宝珠状つまみを有し、口径は22.0cmを測る。6も宝珠状とみられ、5はボタン状つまみを有する。返りはなく全て端部を折り返す。8は土師器台付杯、9が台付皿である。底部切り離しは回転糸切り。色調は浅黄橙色を呈する。10、11は土師器の小形壺で底径はそれぞれ6.8cm、8.6cm、10の残存高8.9cmを測る。底部切り離しは不明。体部は右回転ナデである。底部の器厚は中心部ほど薄くなり、11は最小残存数値は2mmを測る。12、13は須恵器杯で12は低い高台がつく、器厚は薄く12の体部で3mmを測る。14は須恵器壺で胴部は推計13.8cmを測る。頸部外面に粘土を貼りつけて段を設けている。体部は回転ナデで肩部に沈線が入り、体部

外面には浅いカキ目が入った後、一部にナデ消しが見られる。



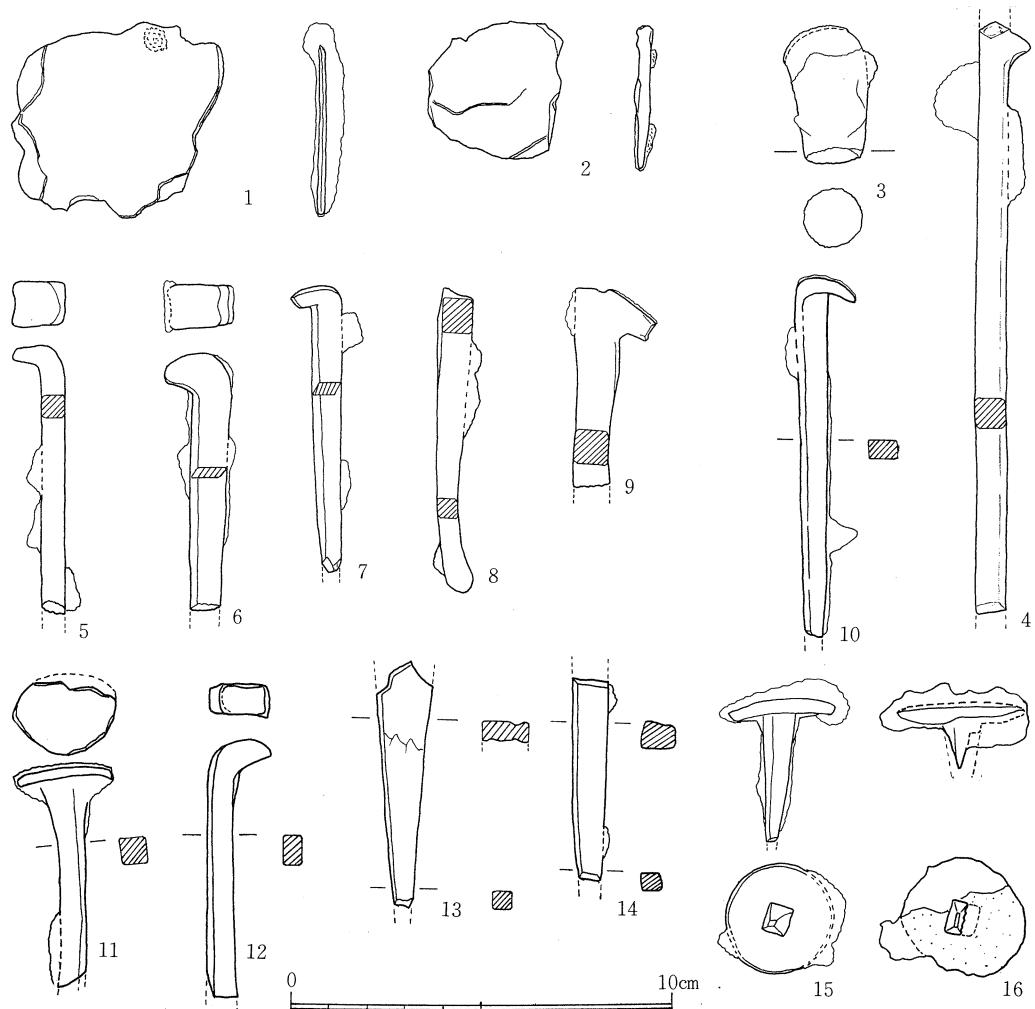
第23図 南側加工段出土土器実測図 (4) (S=1/3) (4. 5. 6. 12. 13. 14. は須恵器)

鉄 器 (第24図)

1、2は板状の鍛造片で1mm未満の薄い板を折りまげたもので刃物の一部と思われる。3の長さ3.5cm、直径1.6cmを測る。用途は不明である。4は全長15.5cmを測る。用途は不明であるが古墳時代にはすでに全長19cmに及ぶ鉄釘が確認されており^④その可能性も残される。5～13は角釘と思われる。このうち10は飾り釘の可能性も考えられる。14、15は飾り釘である。頭部の直徑はそれぞれ2.8cm、3.4cmを測る。

石器及び鉄塊系遺物 (第25図)

1は11.0cm×10.5cmの砥石である。中央付近から立ち割られた後続けて使用されたもの



第24図 南側加工段出土鉄器実測図 (S=½)

と思われる。石質は砂岩で破断面の一部に錆び色の付着物が認められる。底面は上面、腹面、下面の三面が使われる。このほか本調査区からは南側加工段を中心に土器とともに小石大～手のひら大の川原石が遺物包含層から散逸した状態で多数出土した。川原石の多くは偏平で小石の中には少量の煤の付着がみられるものもある。数点を赤外線照射したがいずれも反応はなかった。

鉄滓は小片を含め、総重量5.0kgを採取したが主なもののみを図化した。2、6は鍛冶の炉底滓である。2は手のひら大、6はその半分で重量感がある。磁力は微弱だがこの類いにはかなり反応するものも若干含まれる。表面には砂粒が焼きついており、炉の底が地面に接地していたことが伺える。色調は表面が淡茶褐色、内面が淡黒褐色であるが錆び色を呈する部分もある。これらに類する鉄滓の重量は2,550gで採取した鉄滓の約半分に当たる。3は鉄分を多目に含んだ鍛冶滓でこの種の鉄滓は1個体のみであった。破面には青黒の光沢がみられる。出土した鉄滓中磁力がもっとも強かった。表面には炭の厚痕が残る。重量は270gで全体の5%に当たる。4は10～11cm、厚さ2.5～6.0cmを測り、手のひら大の椀形滓でほかにもう1個体が出土している。断面には錆が入るほか底面近くにはわずかに青黒の光沢がみられる。また断面中に木炭の噛み込みが認められることから小鍛冶の炉であることが伺える。全体の15%に相当する。表面は粗鬆である。磁力は微弱で錆も少なく炉の中心からはずれた部分と思われる。これに類する鉄滓は全体の27%であった。またこのほかにガラス質が含まれるものもわずかに出土している。

南側加工段西方斜面出土遺物（第26図、27図）

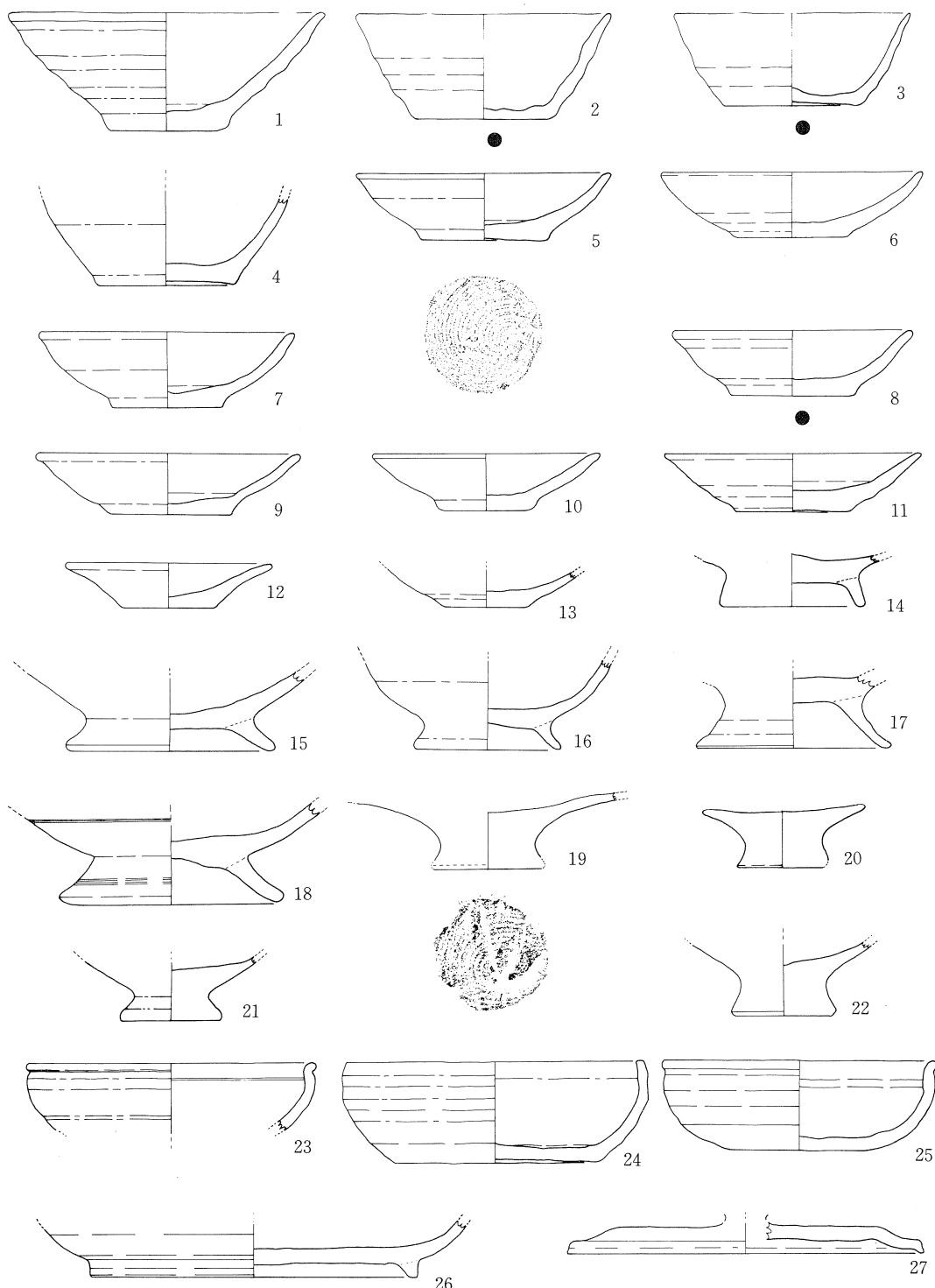
この調査区では遺構は確認できなかったが表土直下から地山直上に至る各土層中から土師器、須恵器、鉄器が出土下。斜面上には頂上建物群が存在しているためこれに伴う遺物が流出したことも考えられる。以下土師器から記述する。

土師器（第26図1～22）

1は体部がわずかに内湾しながら広く上外方に広がる。胎土に石英、長石を多く含む。2～4は体部がほぼ直線的に立ち上がる。2、3には煤の付着がみられる。4は石英を含む。赤土のみでつくられ煉瓦色を呈する。5～13は皿で12を除いて復元口径10.4cm～12.0cm、器高2.6cm～3.0cm、底径4.0cm～5.7cmを測る。底部切り離しは5、6、11が回転糸切り、10がヘラ切り、その外は不明である。胎土は浅黄橙色を呈する。12は口径9.4cm、底径4.3cmと小形の杯で底部切り離しはヘラ切りである。体部内面に指紋痕が認められる。これらのうち8、9、12に煤の付着がみられるがこれまで認められた煤付着の土器に比べて著しく



第25図 南側加工段出土石器・鉄滓実測図 (S=1/3)



● = 煤付着土器
(23, 24, 25, 26, 27. は須恵器)

第26図 南側加工段西側出土土器実測図 ($S=\frac{1}{3}$)

煤の量は少ない。

14～18は高台付杯である。14、17の形状は不明であるが15、16、18は体部が碗形を呈する。胎土に2mm前後の砂粒を含み色調は浅黄橙色である。19～22は皿形の台付杯で21は表採遺物である。12、20は底部が糸切りで離される。19の底部外面から体部外面にかけて淡橙色の塗彩がみられる。

須恵器（第26図23～27）

23～25は須恵器杯身で口径12.2cm～13.6cmを測る。24、25の底部は回転糸切りで切り離された後、一部に粗いナデ、25の底部内面にもナデが施される。体部内外面は回転ナデ。23、25は口縁部を外反させ、24は平らに調整する。色調は青灰色を呈す。26は盤の底部で高台の復元底径14.8cmを測る。底部切り離しは回転糸切り、焼成は不良で浅黄橙色を呈す。胎土は砂粒をほとんど含まず微細である。27は杯蓋で復元口径16.3cmを測る。天井部は回転ヘラ削りの後ナデ、肩部はゆるいナデ肩となり端部に自然釉がみられる。

第4章 まとめ

当初、試掘調査の段階までは地形や切り図等の状況から本遺跡は山城あるいは砦跡と考えて調査を行ったが多量の土器やピットの検出状況などからこの可能性は皆無ではないにせよこの概念をいったん除いて調査を行ったところである。遺構については調査期間も短く十分な成果が得られなかつたことは否めない。加えて調査区全体からおびただしい数の遺物が出土し、遺構との関連が判断しかねる状態であった。以下遺構、遺物について調査の成果をまとめてみたい。

遺構について

調査区全体をとおして頂上建物群から4棟、西側加工段から1棟、南側加工段から1棟の合計6棟の堀立柱建物を復元した。頂上建物群では簡易ではあるが石列も確認された。建物の規模としては南北が7.6m～14.0m、東西4.2m～7.5m、但しSB06は4.25m×17.5mであった。このようにかなり大きな建物が復元されたがこのうちSB01はほぼ磁北を向いている。時期については資料に乏しく出土した遺物と同時期と考えるならば8世紀中頃から12世紀頃のものと思われ、数百年かの間に何度も立て替えられた可能性も考えられる。なお、鍛冶遺構については化学分析を行わなかったため、まことに残念ながら時期その他の性格は不明であるが、地面を浅く掘りくぼめた簡易な火床をもつ小規模な小鍛冶が営まれたことが想像される。

遺物について

土師器がまとまって出土した例としては松江市石台遺跡^⑤、天満谷遺跡^⑥、中竹矢遺跡^⑦、三刀屋町京殿遺跡^⑧などがあげられる。本遺跡から出土した土師器はおよそ3世紀にわたる広範な時期が予想される。まず壊類の時期については第21、22図中の丹塗り土師器が9世紀代と考えられる^⑨。続いて第16図中のSK02出土土器の2～12、第26図2、3にみられるように壊の形態が底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものがあり、松江市神田遺跡出土土器^⑩（須恵器）、同市長峯遺跡出土土器^⑪を参考にするとこれらの土師器は9世紀後半から10世紀初頭のものと考えられる。また第20図1～3は前述の器種と形状が似ているが、底径が比較的小さく器高が高くなっている。この種の土師器はほかに類例がみられないが出現時期としては前述の時期より後出するものと思われる^⑫。高台付壊についても資料に乏しいところだが松江考古第8号^⑬を参考にすると、第21図2が安来市大坪3号墳出土^⑭の高台付碗に近似し、第19図1、3、5、第21図1が高い高台をもつ点で松江市池ノ奥2号墳出土^⑮の高台付壊と同じ範疇に入るのではないかと思われ、時期としては10世紀から11世紀と考えられている。さらにSK03の土器溜りから多く出土した第18図1～4、第23図1は天満谷遺跡の土師器分類によると碗a類に当たると思われ、時期は12世紀後半と考えられる。皿形の壊については形態が変化に富んでいて分類しかねるが第16図の皿のようにSK02から一括出土している15、16、18、19の体部は器厚が薄くほぼ直線的に伸びている。この土坑からは13、14、17のような内湾傾向の皿形壊も同時に見られることを考えると同一時期においてこの種の形態もさまざまであった可能性も残される。台付皿等その他の土師器については中世とだけにしておきたい。

既述の通り、本遺跡から出土した土師器片は1万点をはるかに超えた。試算として各調査区における土師器を器種ごとに数量を割り出してみた。算出方法としては各調査区から出土した土師器片の底部を拾い出し、合わせた形がほぼ円形になったものを1固体と想定するものである。

表-1 妙見山遺跡出土土師器数概算表

| 調査区 ＼ 器種 | 壊、皿種 | 丹塗り 土師器 | 高台付壊 | 台付壊 | 灯明皿 | 合計 |
|----------------|--------------|------------|-------------|-----------|-----------|------|
| 頂上建物群 | 95 | 1 | 26 | 1 | 2 | 125 |
| 西側加工段 | 348 | 9 | 95 | 6 | 3 | 461 |
| 南側加工段 | 1055 | 99 | 234 | 51 | 41 | 1480 |
| 小計 (%) | 1498 (73) | 109 (5) | 355 (17) | 58 (3) | 46 (2) | 2066 |

表－1のよう概算で2千点を越える土師器が存在したことが考えられるが実際にはこの数をまだ上回ることも充分予想される。

出土した土師器の固体数を調査区で比較してみると堀立柱建物が数棟あったと思われる頂上部に比べ、南側加工段の出土数が圧倒的に多いことがわかる。また丹塗り土師器の出土もここに集中していることが分かる。あえて想像するならば祭祀に使われた土器が頂上から投げ捨てられ、あるいは廃棄されたとの考えも浮かんでくる。なお、中世陶磁器の出土は皆無であった。

須恵器について検討してみると出土量としては、土器全体の1割に満たないものであった。器種では杯身、杯蓋、甕片が中心で肩部に特徴のある壺もみられた。この壺は日常用とは違う使われ方があったことも想像される。須恵器の時期としては松江考古第3号^⑩を参考とすると杯身では第26図23～25が8世紀中葉から8世紀後半と考えられる。杯蓋については第23図4～6、第26図27とも8世紀代から9世紀半と推定される。

遺物の年代を中心に記してみたが本遺跡の性格について一つの示唆を与えてくれるもののが妙見山の地名である。本遺跡から見て妙見山山頂の真裏の山腹には平坦地があり、近年まで妙見社といわれる祠があったようである。「雲陽誌」によると日井郷山方の項に祭禮10月13日とだけ記されており、このほかにも各地に妙見、あるいは妙見社の名がみえるが、そのほとんどが勧請年代等詳細は不明である。

妙見あるいは妙見信仰は10世紀の貴族社会、怨靈思想の流行下で盛行したとされる星宿信仰で北辰、すなわち北斗七星を祀る信仰といわれ、8世紀中頃、宇佐八幡神の託宣上京を一つの発端とされる「神仏習合」の思想が広まることにより仏教、特に密教修法と習合したのが妙見菩薩（北辰菩薩）といわれている^⑪。立地的にみても本遺跡は木次町下熊谷から三刀屋町給下一帯を眼下に見下ろす山丘に位置しており、深山幽谷の地ではないにせよ急峻な高台で何等かの祭祀が行われたことは想像に値する。またこのような立地、性格に比較的似かよった遺跡として安来市陽徳遺跡が発掘されている。陽徳遺跡ではいみじくも本遺跡のSK02出土土師器と近似する土師器類が土掘内から出土している^⑫。歴史的にみても山岳信仰が興った時代に当ると思われ、両遺跡の性格を考えるうえで非常に興味深いものがある。

このように本遺跡は仏具等祭祀に直接つながる遺物は確認されなかったものの、飾り釘や穿孔土器あるいは灯明皿の出土等により奈良時代後期から平安時代にかけての山岳信仰にかかわる祭祀遺跡の可能性が強いことが伺える。

なお本遺跡より斐伊川をはさんで西方1.5kmの三刀屋町地内峯寺山（出雲国風土記にいう伊我山）の山腹には658年開山といわれる密教靈場、峯寺が所在し、さらに南東4.0km

の木次町宇谷及び寺領地内にある室山（標高260.3m）中腹には平安時代に山岳仏教が栄え^⑯、四十二坊もの堂が立ち並んだと言い伝えられる平坦地があり^⑰、時期がほぼ重なるだけに中世の人々の信仰への熱い思いに心が寄せられる。

このように木次町では少なくとも二か所の山岳寺院が中世に存在していたことが考えられ、これまでほとんど確証が得られなかった「伝室山寺跡」についても重要な示唆を与える貴重な資料を提供したといえる。

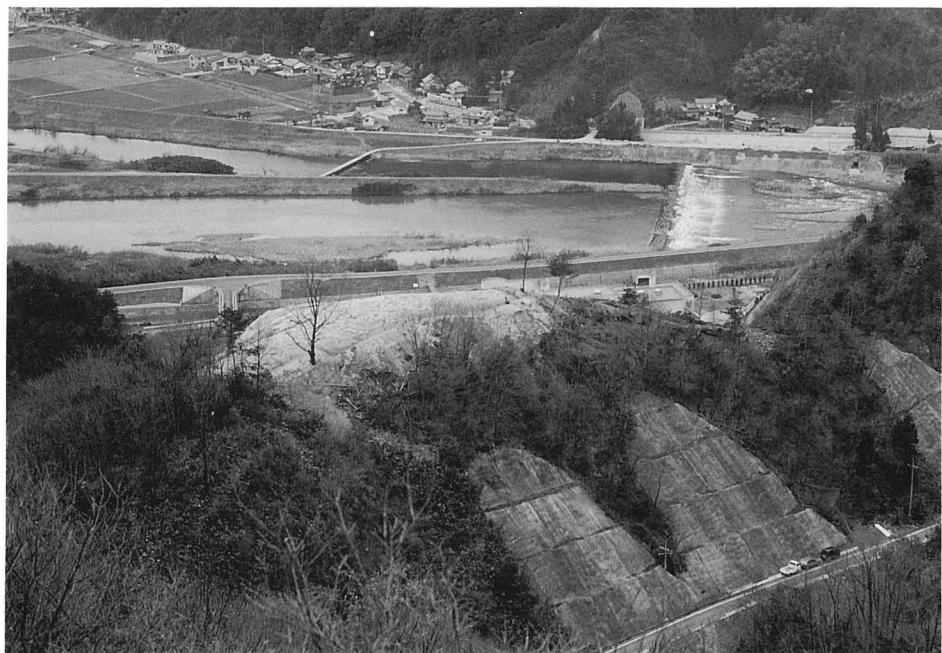
注

- ① 「平城宮発掘調査報告XⅢ」1991年より改変
- ② 形態の近似する赤色塗彩の土師器が松江市黒田畠遺跡でも出土しているが底部の切り離しは回転糸切りとなっており、製作技法において相違がみられる。松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団「黒田畠遺跡発掘調査報告書」1995年 同財団 瀬古諒子氏のご教示による
- ③ 発売元 (株)富士平工業 1995年版「新版標準土色帖」による
- ④ 「奈良県報告31」1976年 石光山古墳群27号墳出土
- ⑤ 島根県教育委員会『石台遺跡』1986年
- ⑥ 島根県教育委員会「天満谷遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年
- ⑦ 島根県教育委員会「中竹矢遺跡」『一般国道9号松江道路建設予定地内発掘調査報告書X』1992年
- ⑧ 三刀屋町教育委員会『京殿遺跡調査概報』1979年
- ⑨ 島根県教育委員会文化財課 広江耕史氏のご教示による
- ⑩ 島根県教育委員会「神田遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』1987年
- ⑪ 松江市教育委員会『中竹矢1号墳・長峯遺跡』1987年
- ⑫ 島根県教育委員会文化財課 広江耕史氏のご教示による
- ⑬ 広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古第8号』1992年
- ⑭ 島根県教育委員会「大坪古墳群」『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘報告書』1976年
- ⑮ 松江市教育委員会「池の奥古墳群」『松江市東工業団地内発掘調査報告書』1990年
- ⑯ 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古第3号』1980年
- ⑰ (1) 速水 侑『日本佛教史－古代』吉川弘文館1992年
(2) 〔縮印版〕『日本宗教事典』弘文堂1994年
- ⑱ 島根県埋蔵文化財調査センター 深田 浩氏より現地においてご教示をいただく
- ⑲ 島根県遺跡地図には「伝室山寺跡」と登録されている。
- ⑳ 『木次町誌』1972年

図版



妙見山遺跡遠景(後方は妙見山山頂) (西より)



妙見山遺跡全景(東より)

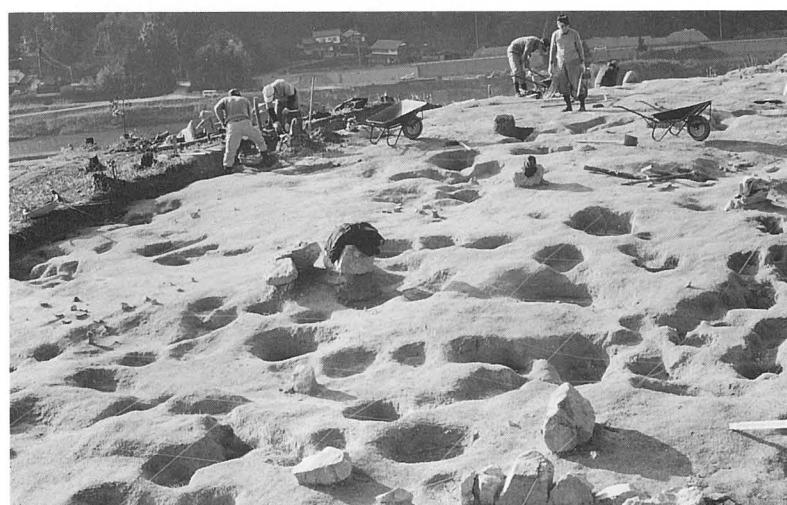
図版 2



南側加工段西斜面
土層堆積状況
(南より)



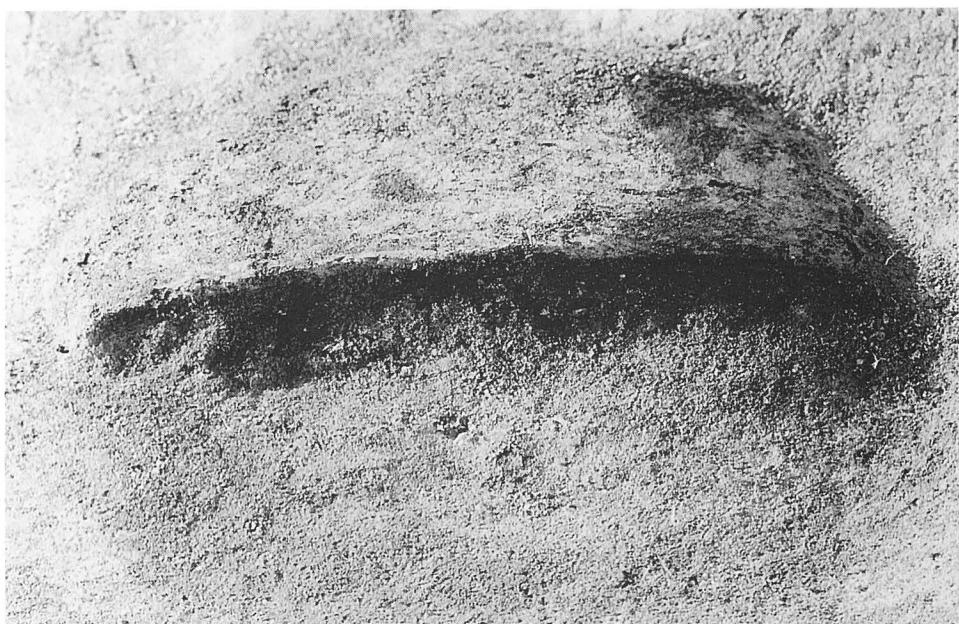
南側加工段東斜面
土層堆積状況
(北より)



頂上建物群
作業風景
(東より)



SK02遺物出土状況



SK04焼土検出状況

図版 4



南側加工段
遺物包含層
(西より)



地山表出状況
(同位置)



SK03検出状況



頂上建物群完掘状況(東より)



西側加工段完掘状況(北より)

図版 6



12図 外面



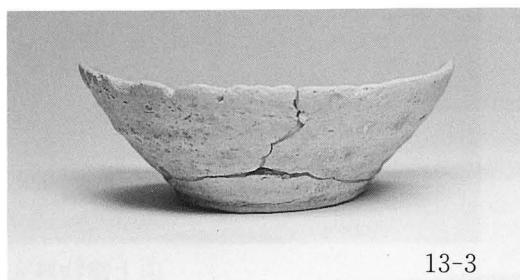
内 面



13-1



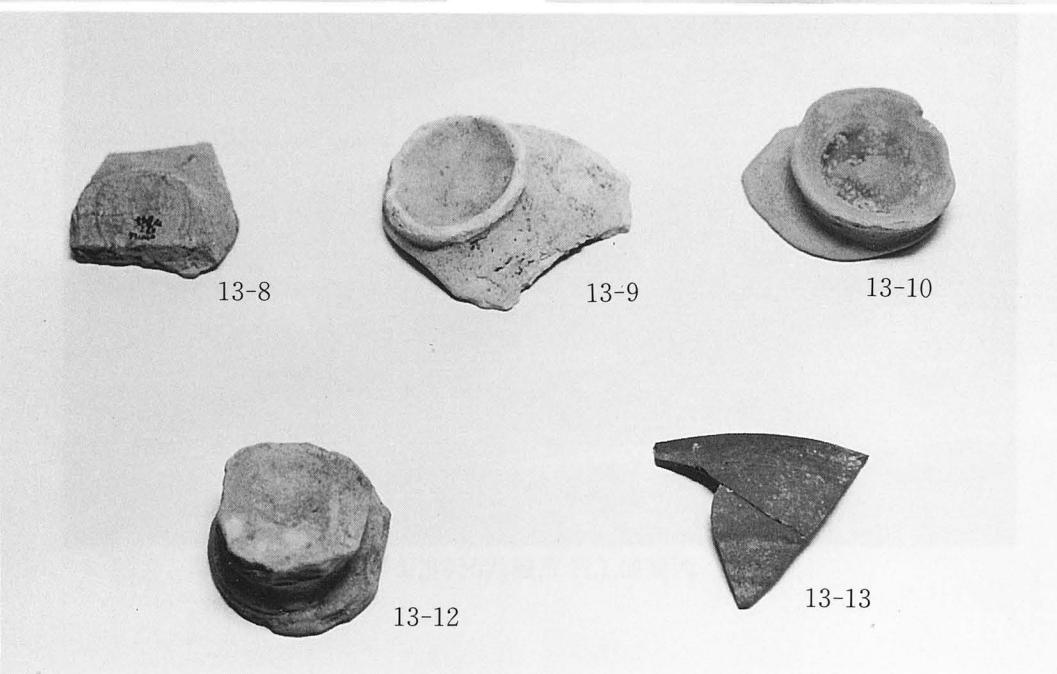
13-2



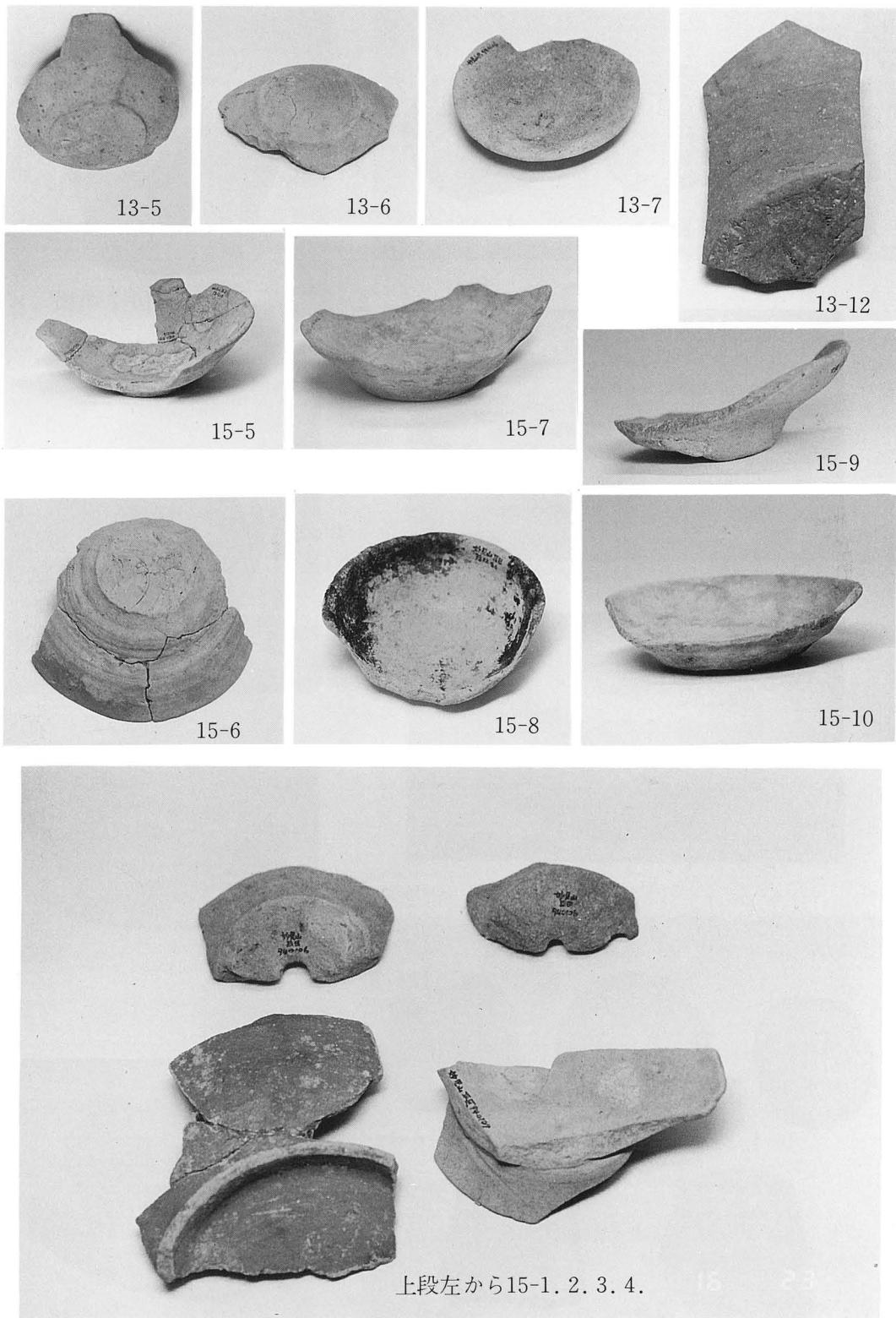
13-3



13-4

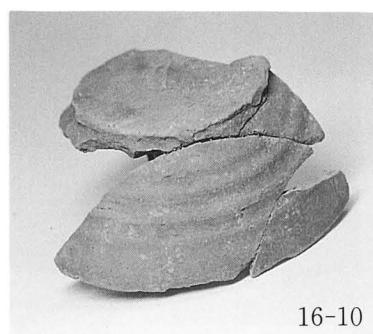
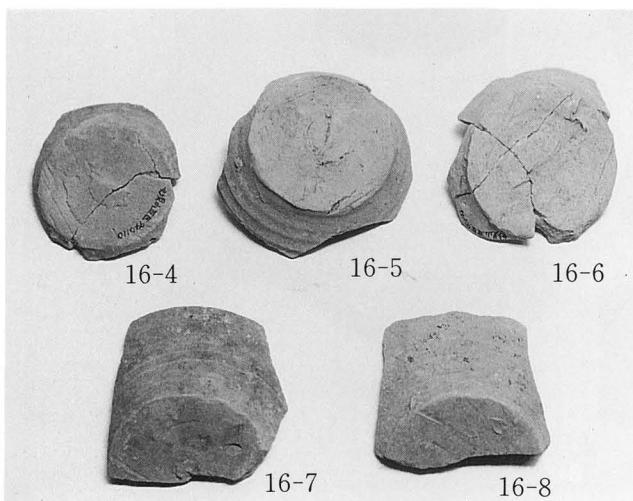
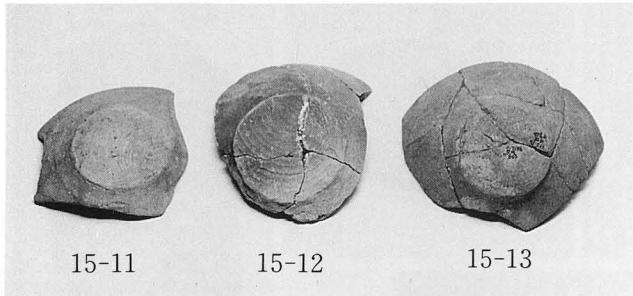


頂上建物群出土遺物 (1)



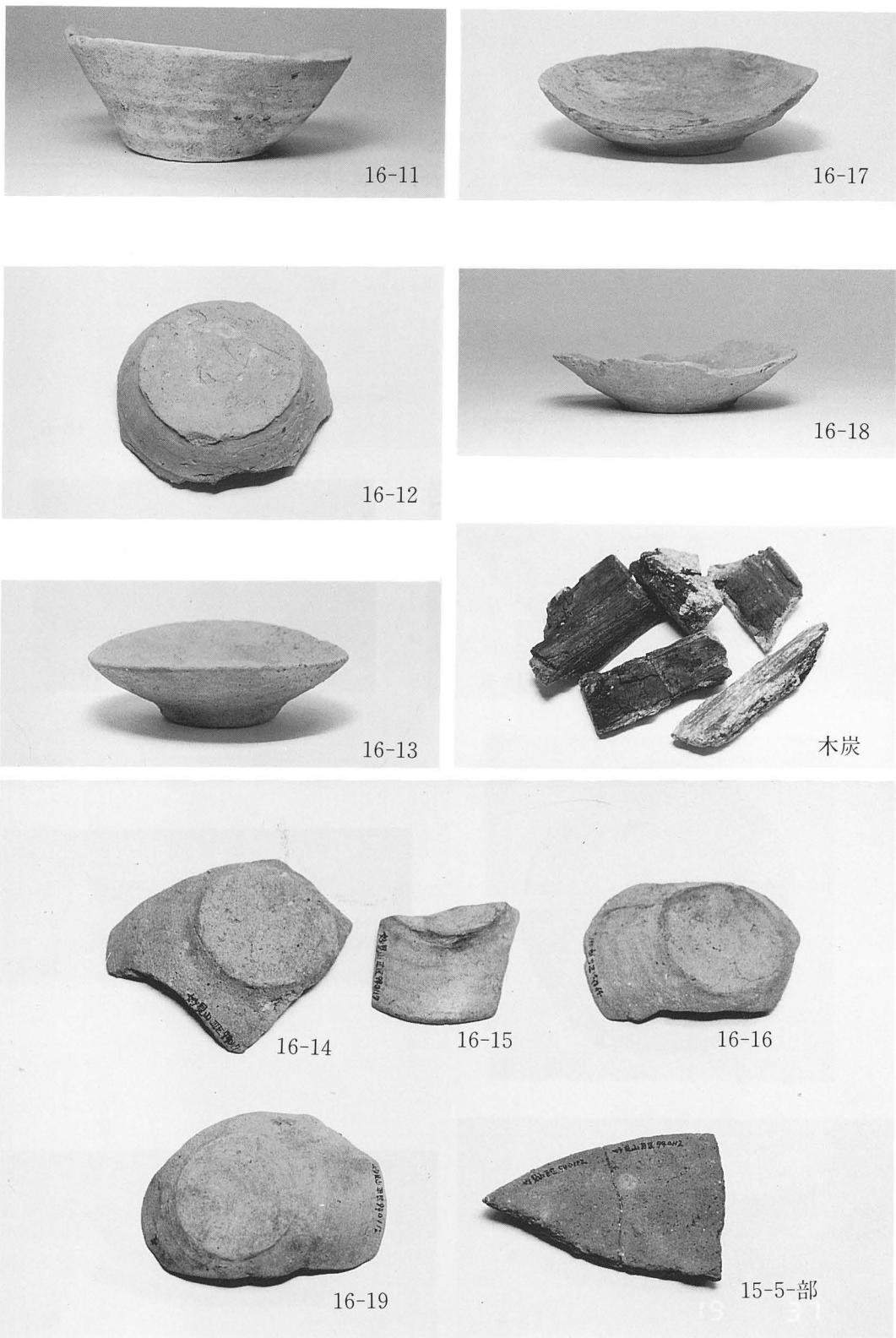
頂上建物群出土遺物 (2) 13-5. 6. 7. 12.
西側加工段出土遺物 (1)

図版 8



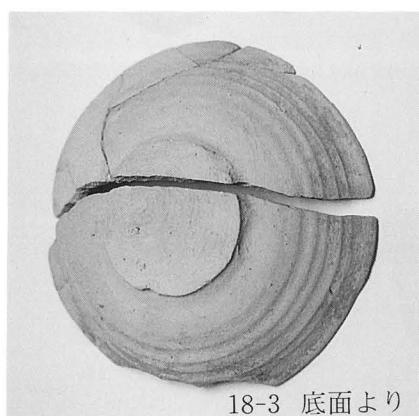
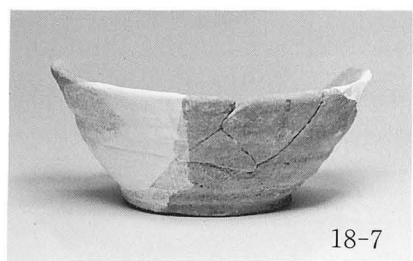
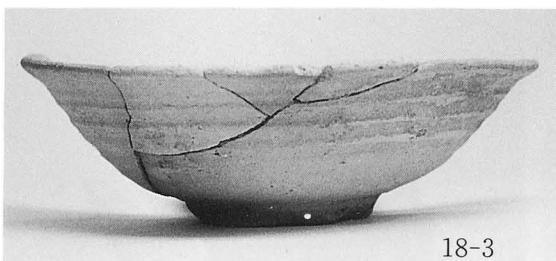
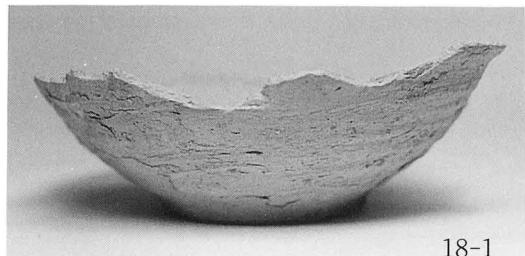
頂上建物群出土遺物 (3) 15-11. 12. 13.
SK02出土遺物 (1)

図版 9



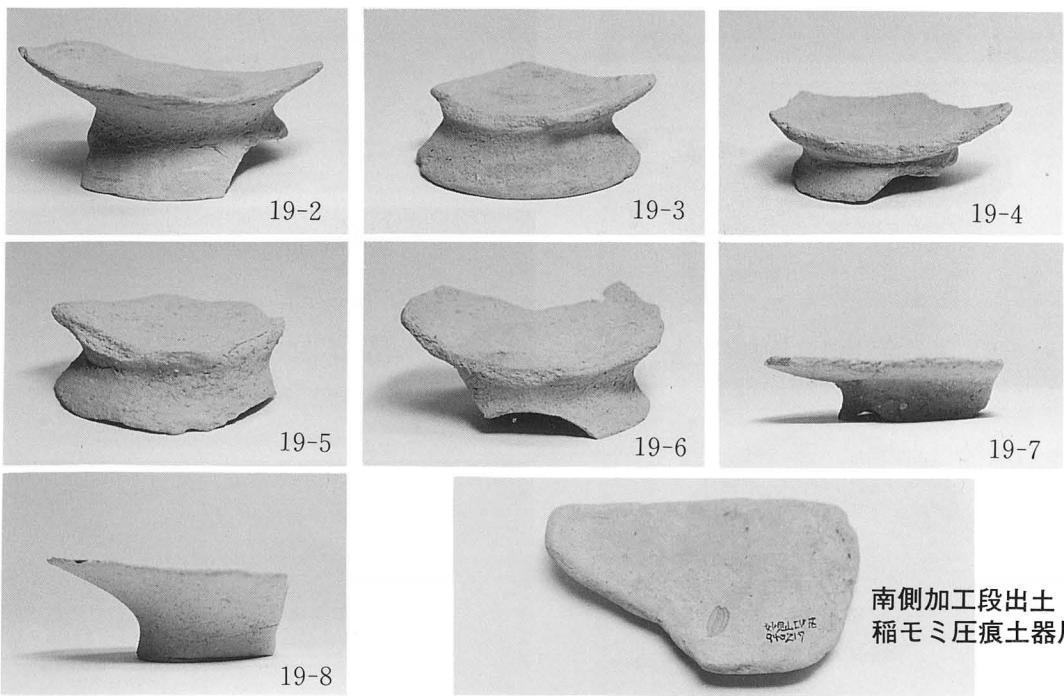
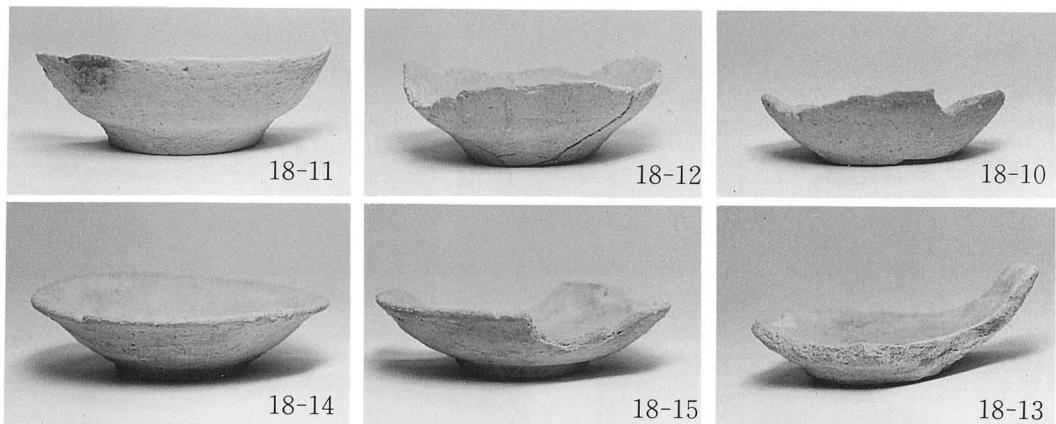
SK02出土遺物 (2)

図版 10



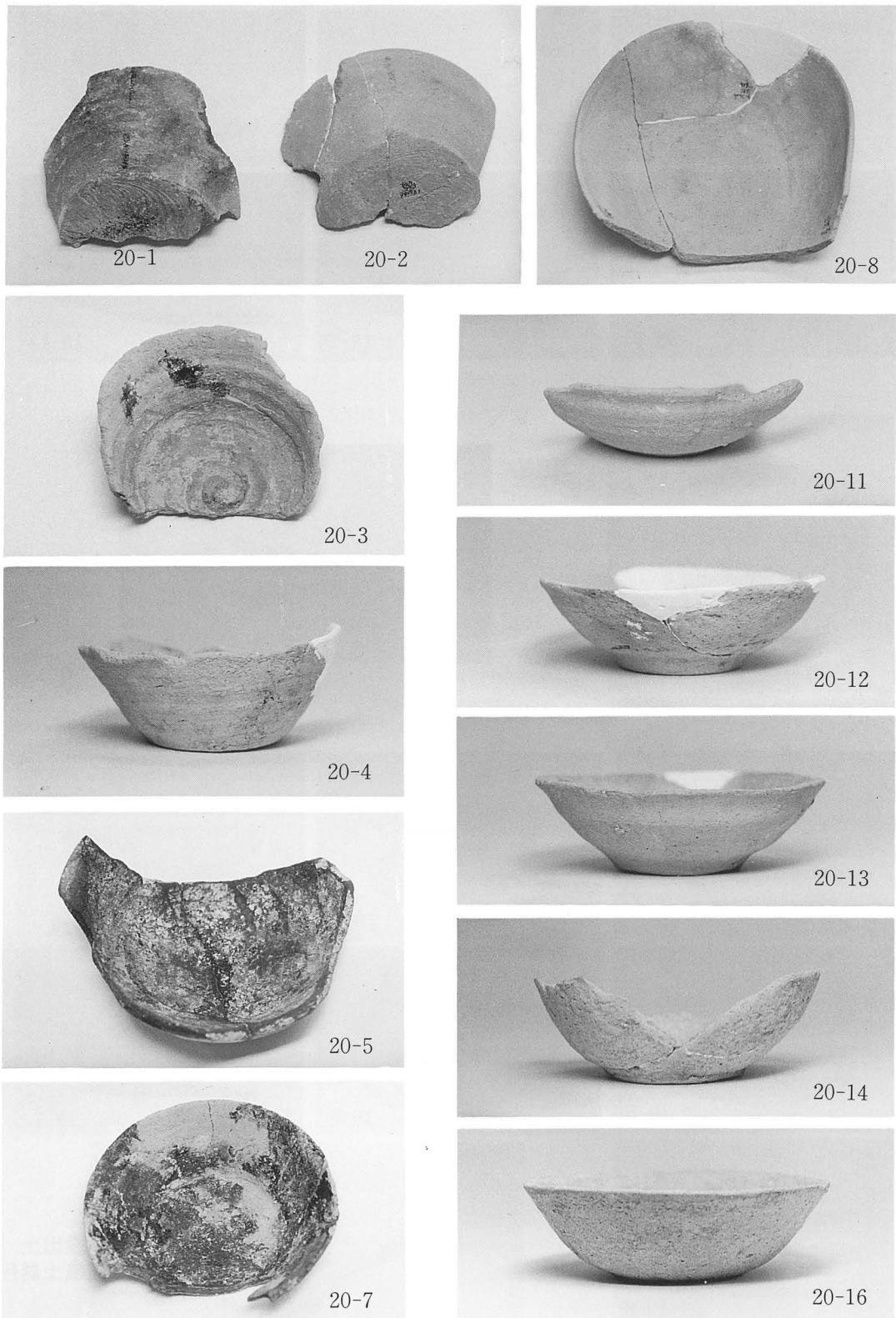
SK03出土遺物 (1)

図版 11



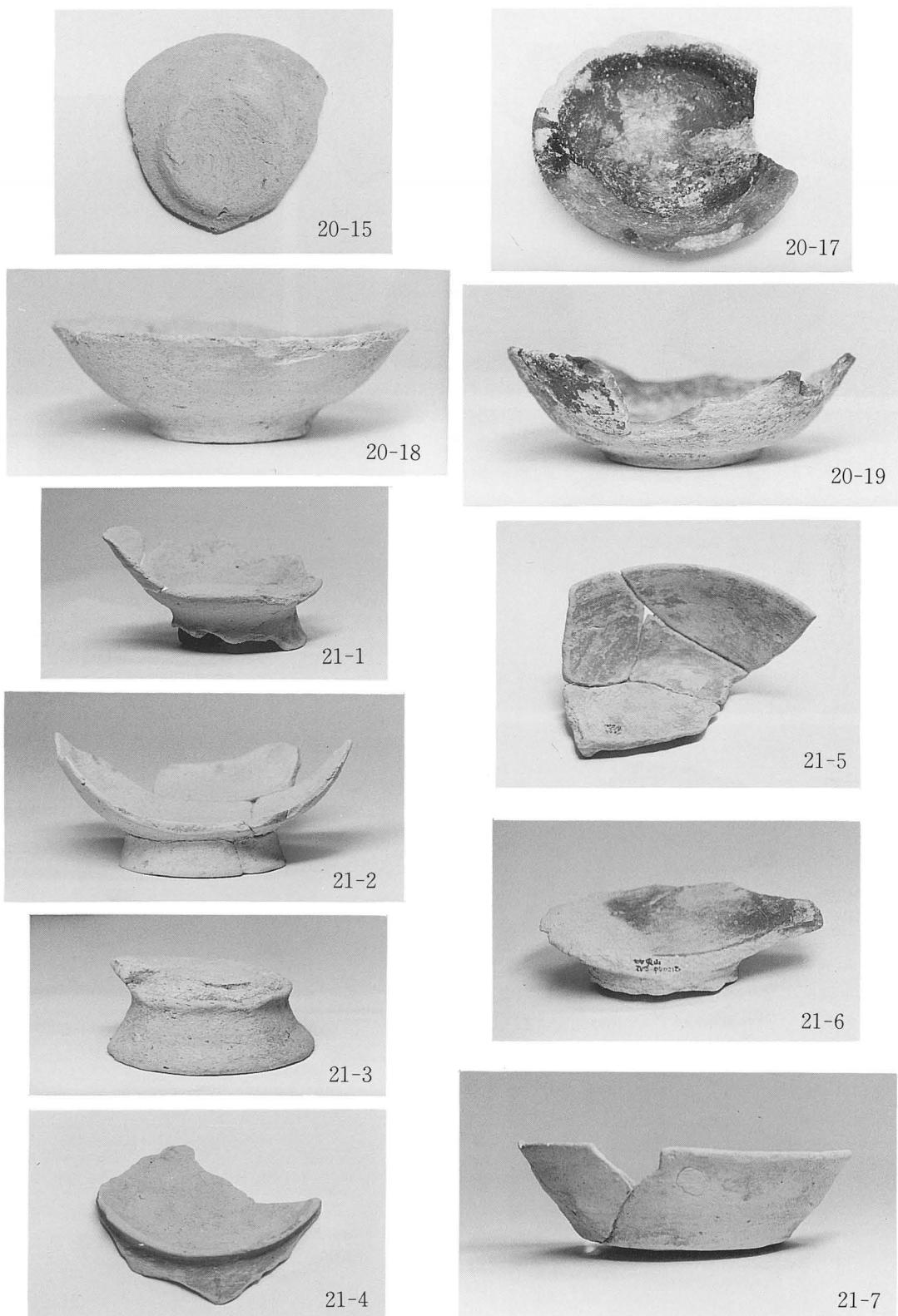
SK03出土遺物 (2)

図版 12



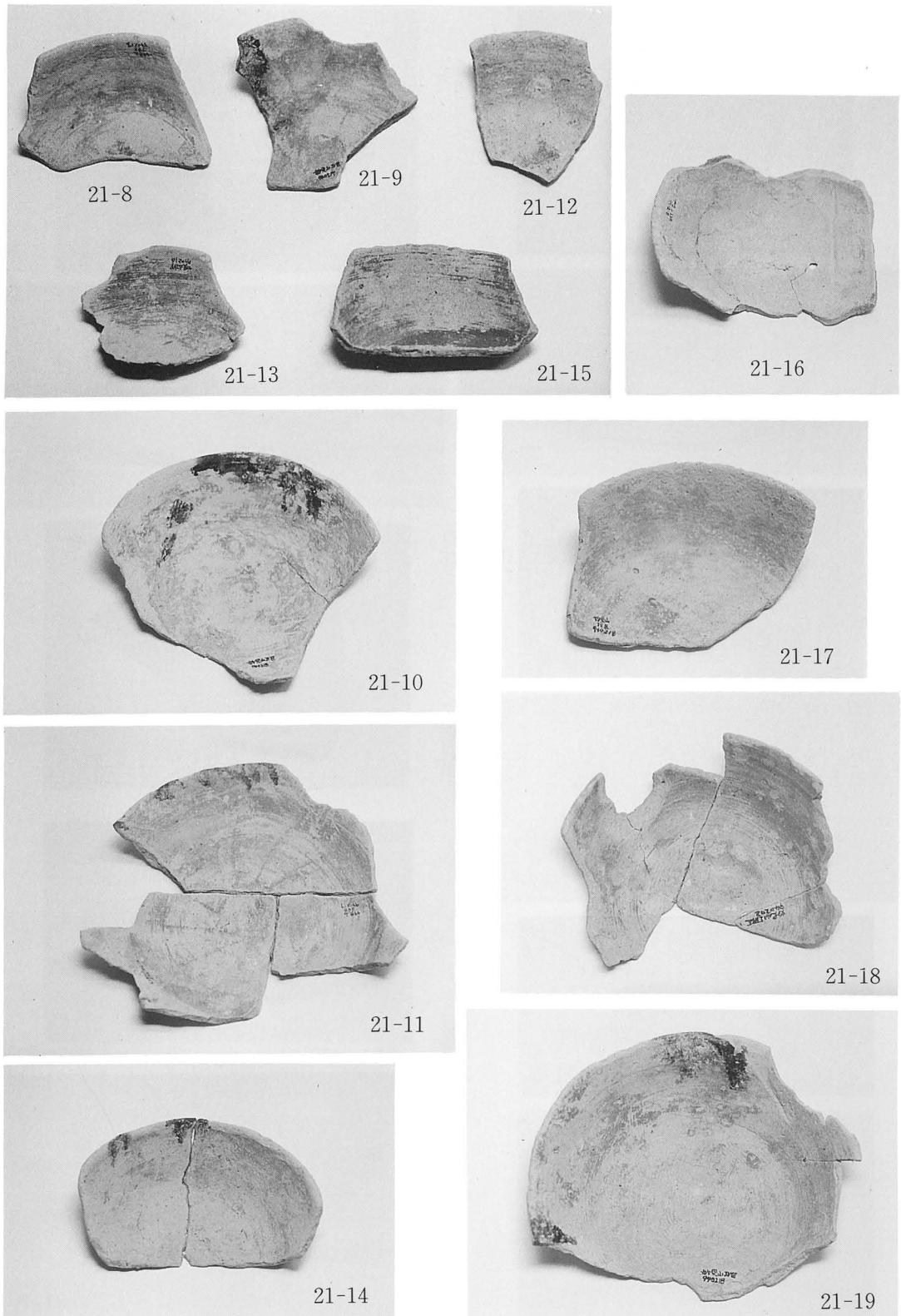
南側加工段出土遺物 (1)

図版 13

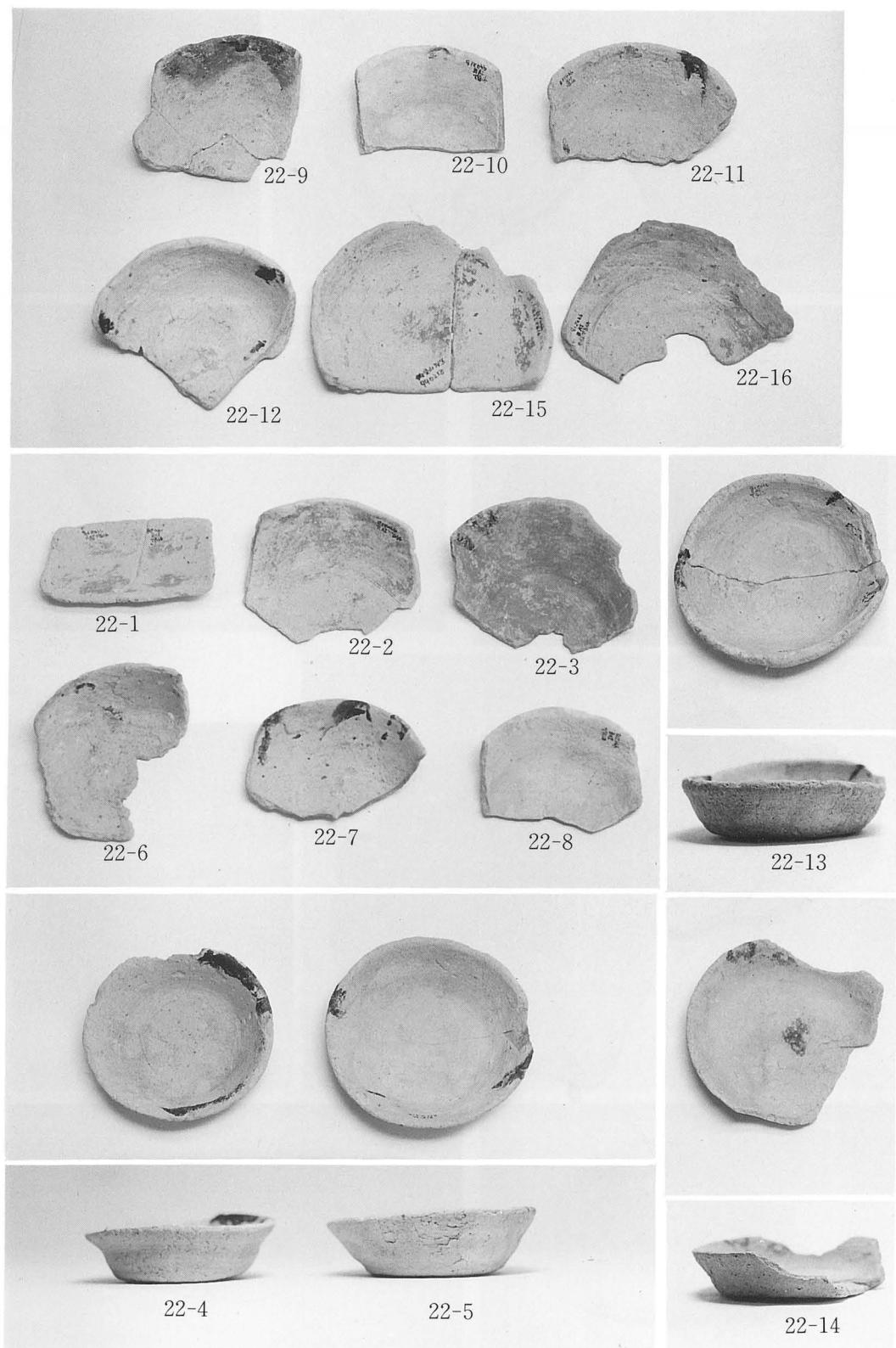


南側加工段出土遺物 (2)

図版 14

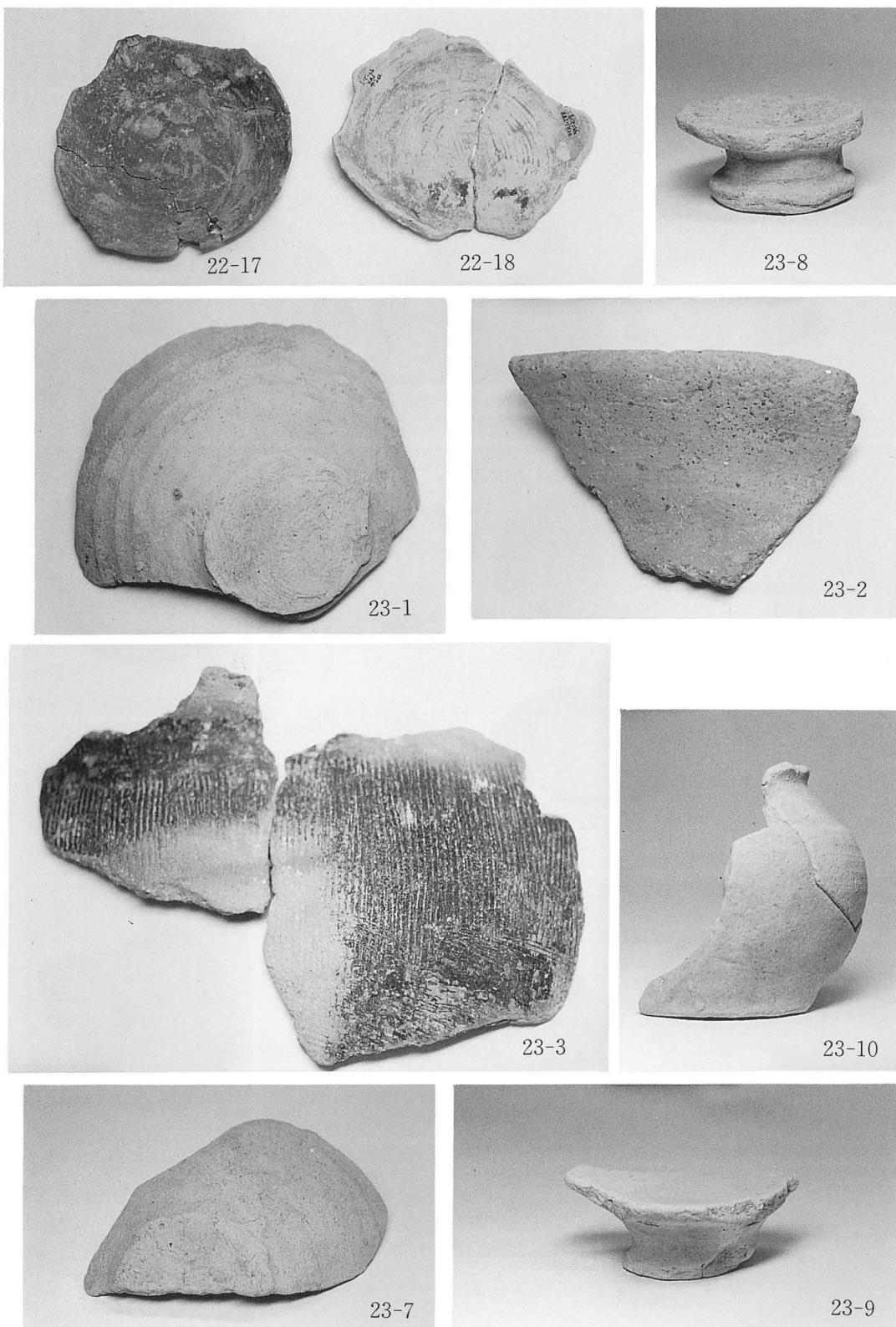


南側加工段出土遺物 (3)

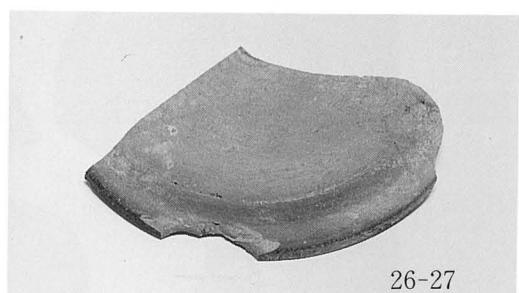
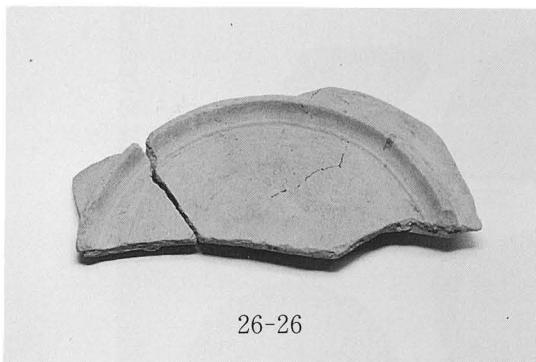
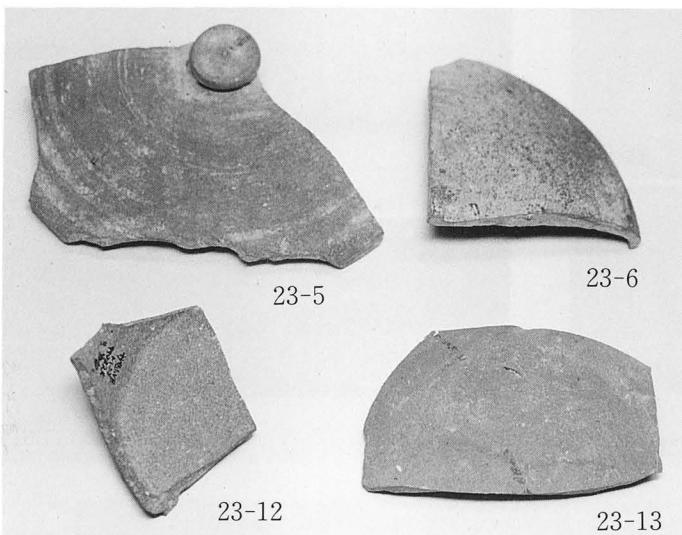
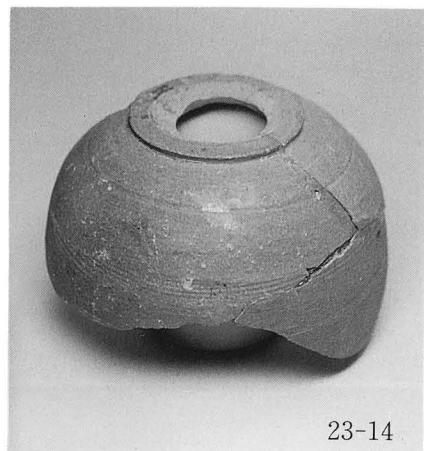
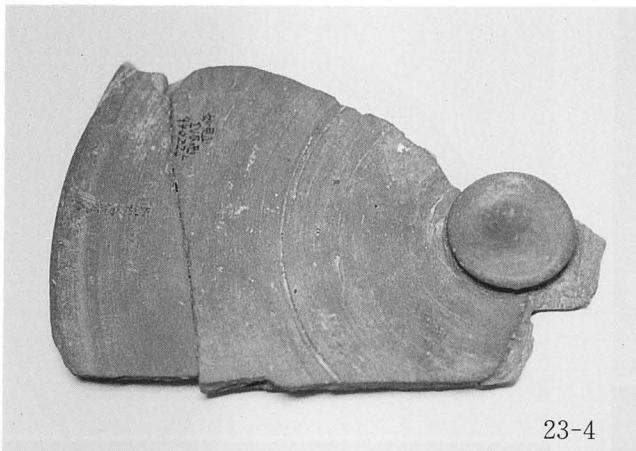


南側加工段出土遺物 (4)

図版 16



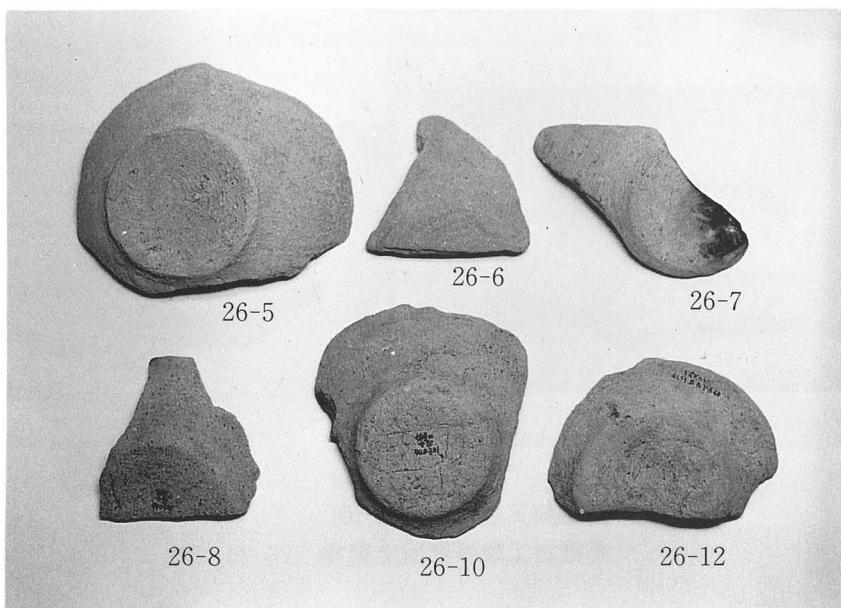
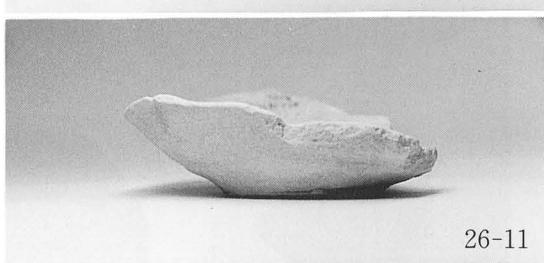
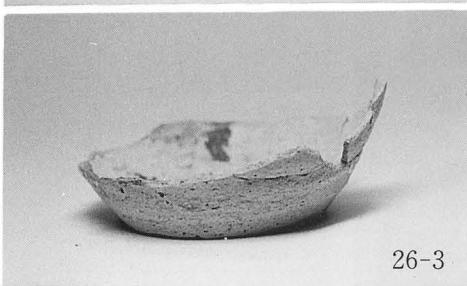
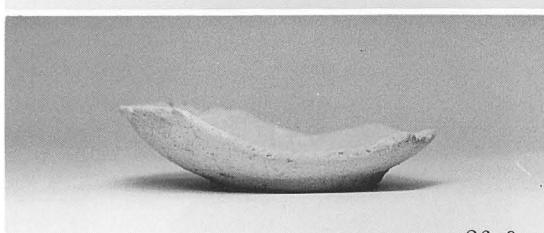
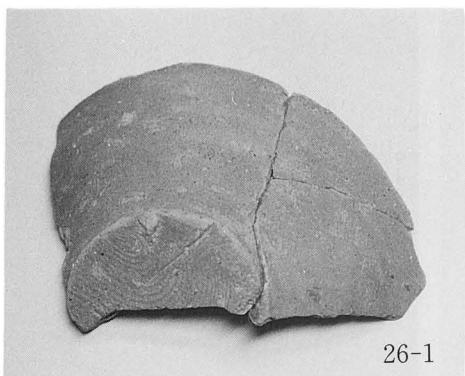
南側加工段出土遺物 (5)



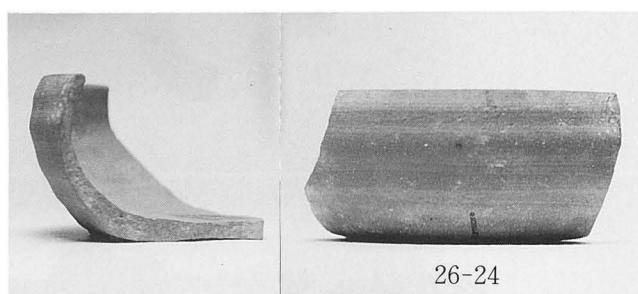
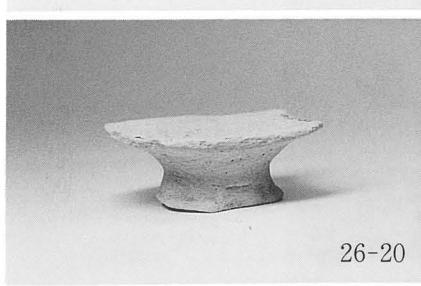
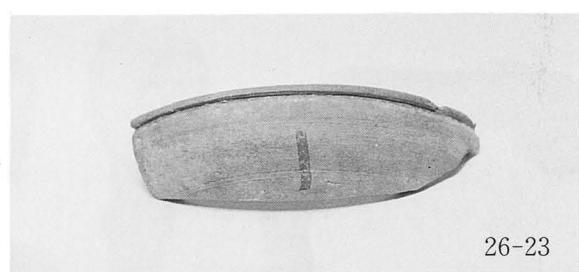
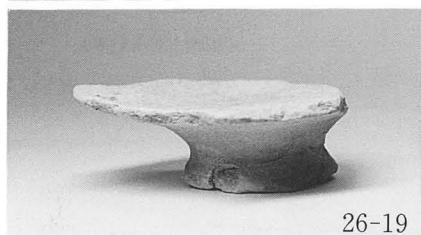
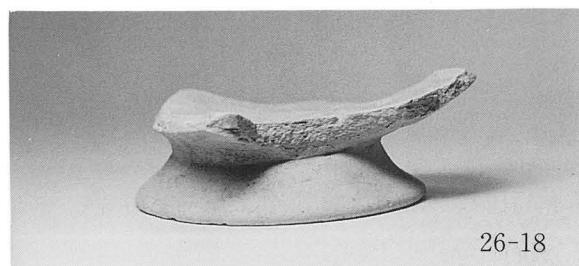
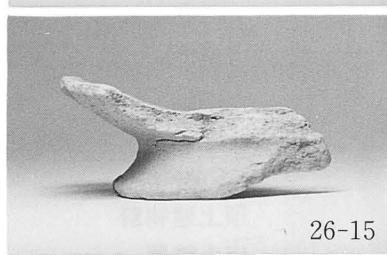
南側加工段出土遺物 (6)

南側加工段西側出土遺物 (26-26, 27)

図版 18

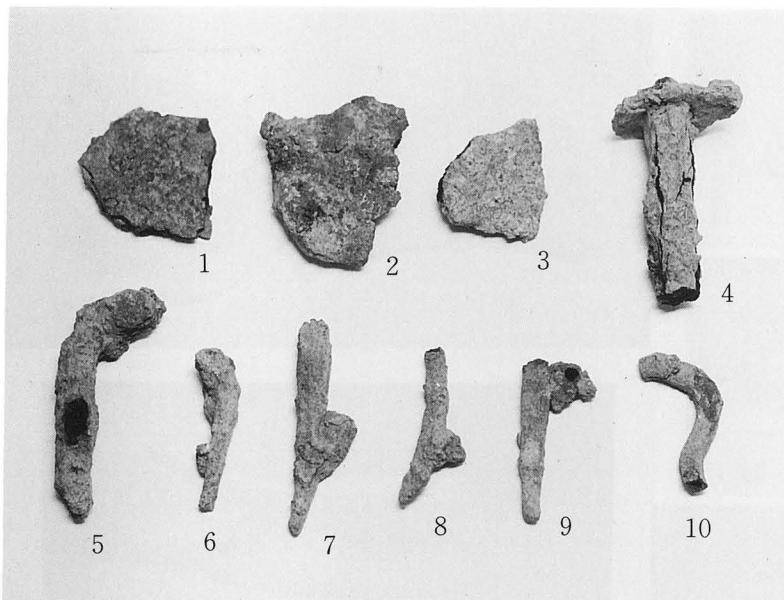


南側加工段西側出土遺物 (1)

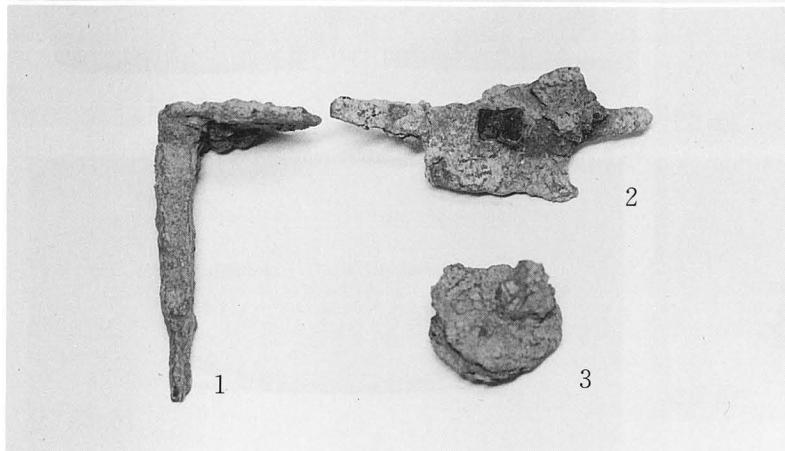
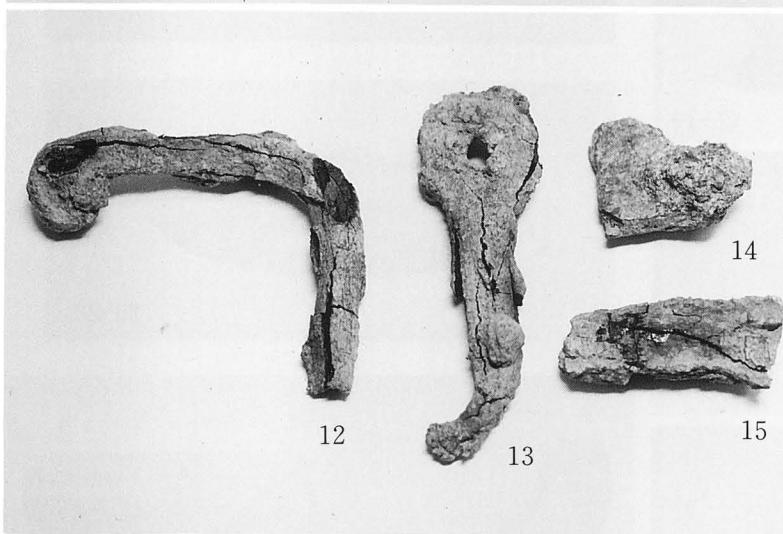


南側加工段西側出土遺物 (2)

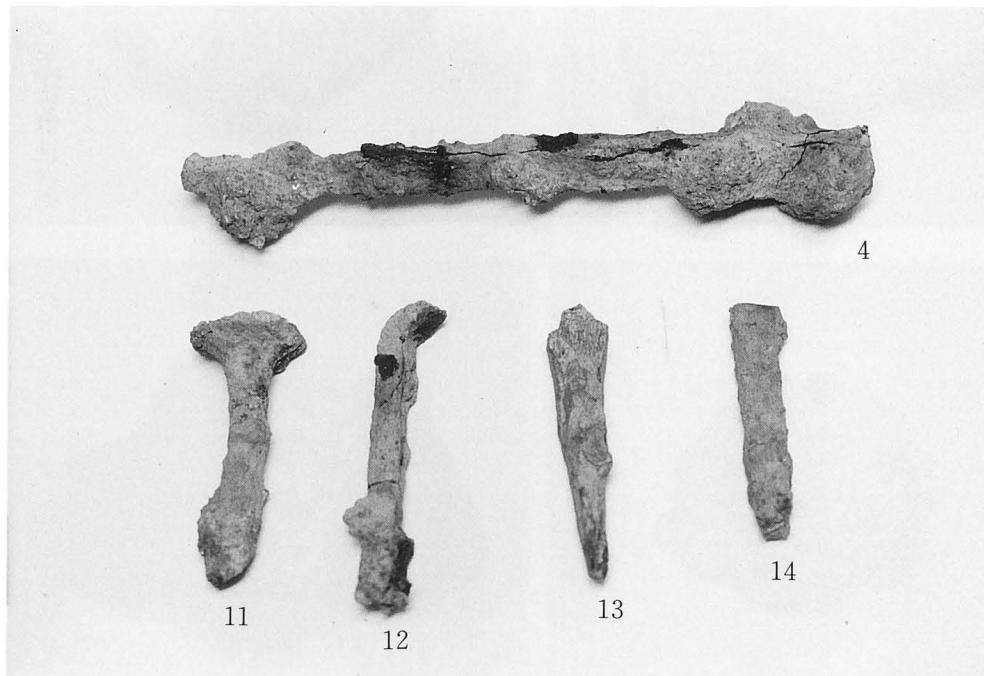
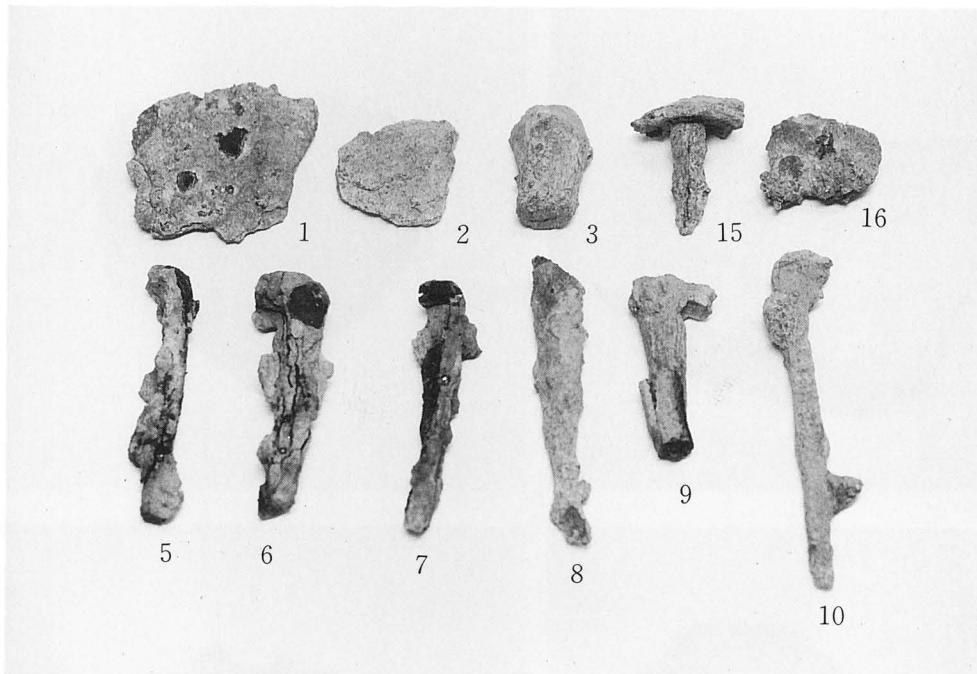
図版 20



頂上建物群
出土鉄器
(挿図 第14図)

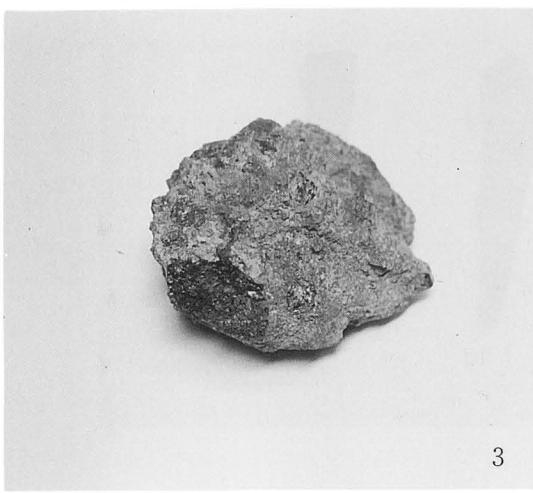
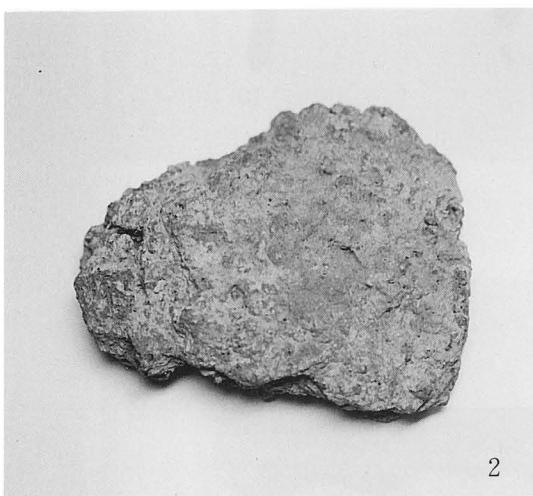


西側加工段
出土鉄器
(挿図 第17図)



南側加工段出土鉄器（挿図 第24図）

図版 22



南側加工段出土砥石・鉄滓（挿図 第25図）

既刊 木次町文化財調査報告書

| | | |
|-----|-----------------|-------|
| 第1集 | 木次深谷古墓発掘調査報告書 | 1984年 |
| 第2集 | 斐伊中山古墳群 - 西支群 - | 1993年 |

平成7年3月30日 印刷

平成7年3月31日 発行

妙見山遺跡発掘調査報告書

発行 木次町教育委員会

印刷(有)木次印刷